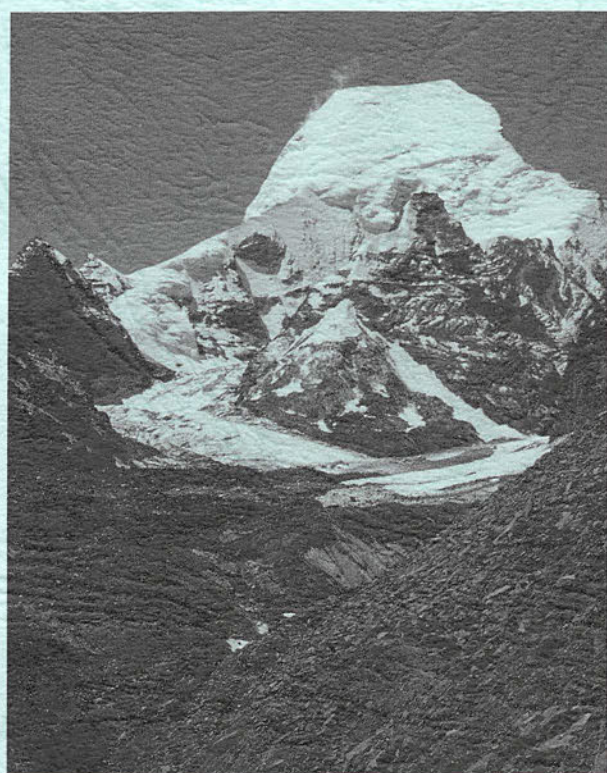


サトパント峰登頂記

聖地巡礼の山旅



日本ヒマラヤ協会

THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN

聖地巡礼の旅

サトパント峰登頂記

HAJガンゴトリ登山隊 1990年
登山報告書

日本ヒマラヤ協会

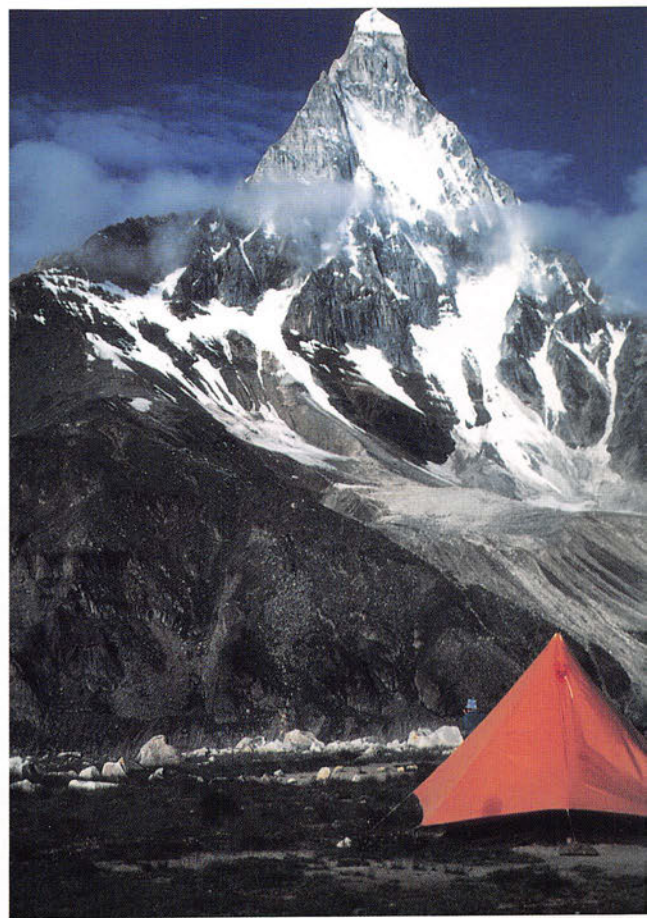
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN



BC～C1間の「コーナ」から見るサトバント峰



ゴウムク(下)とバギラティ3山



名峰シブリン



湖のほとりのBC



BC近くで草を喰むアイベックスの群れ



C1上部の氷河を行く



C2とサトバント山頂



ヴァスキ・バルバット東面



ナイフリッジを下る

登山中に出合った花

関 根 幸 次

ガンゴトリからのキャラバンで花の楽園は、ボジュバスおよびナンダンパンのオアシスとヴァスキタールである。とくに目を引くのはナンダンパン周辺に咲き乱れる高山植物の群落であり、ヴァスキタールからサトバントが見られるコーナーまでが植物の分布している限界であろう。コーナーから先、スンドル氷河サイドモレーンには植物は発見できなかった。

厳しい自然環境下で生きてゆく植物や動物の偉大さに驚くばかりである。高山植物やアイベックス（山羊）の群がナンダンパンおよびヴァスキタールのテントサイト周辺に散歩に現れる。実に可愛らしく、狭い草の生える場所を移動し生活しているのだろう。

コースの両側に咲く花に、緊張する身心が解放され、和らぐ気分になった。



ケンディアナ（リンドウ科）
Gentiana ornatadum 7/26 ヴァスキタール



ポリコーヌム・バクシニフォリウム（タデ科）
Polygonum vacciniifolium 7/25 ナンダンパン



セドム・クアドリフィドム（ベンケイ草科）
Sedum quadrifidum 7/26 ヴァスキタール



アナファリス・ブスア（キク科）
Anaphalis busua(compositae) 7/25 ナンダンパン



セリ科の植物
Umbelliferae 7/25 ナンダンパン



シレネ（ナデシコ科）
Silene 7/19 チルバス付近



プリムラ・スチュアルティ(サクラ草科)
Primula stuartii Wall
7/23 ナンダンバン



テルフェニウム・カエルレウム
(キンボウゲ科)
Delphinium caeruleum
7/25 ヴァスキタール



メコノフシス・ワリッキイ(ケシ科)
Meconopsis wallichii
7/24 ナンダンバン



パルナシア・ヌビコーラ(ユキノシタ科)
Parnassia nubicola
8/14 ナンダンバン



ペディキュラリス・ロンギラローラ
(シオガマ科)
Pedicularis longiflora
7/25 ヴスキタール



インパティエンス・キンビフェーラ
(ツリフネソウ科)
Impatiens cymbifera
8/15 ガンコトリー



ポテンティラ・フルティコーサ
Potentilla fruticosa
8/14 ナンダンバン



インパティエンス・ラケモーサ(ツリフネソウ科)
Impatiens racemosa
8/15 ガンコトリー

序

1990年サマーキャンプ・サトパント隊ほど、いろいろな意味において“H A Jらしさ”を発揮した隊はなかったと思われる。もちろん今回の成果は隊と隊員の努力によってもたらされたものであるが、H A Jがこれまでに派遣してきた70にのぼる登山隊の歴史の累積と組織の理念が実によくにじみ出ていると感じられるのである。

20代から50代までの隊員が、それぞれ異なる思想と経験を持って広い地域から集まり、一定の確認をベースにして、互いを尊重しながら行動し、共通の目的を見事に完成させた。これは、あたりまえのように見えながらも実は重い意味を有している。私は、そこに1992年に創立25周年を迎えようとしている本会の年輪の成長を感じるのである。

H A Jには、いろいろな人が集まっている。共通のキーワードは“ヒマラヤへの憧れ”という一点である。ヒマラヤは、大きく、広く、深い。そこでは多様なヒマラヤン・ライフを追求できる可能性があるはずである。そして、会員の多様なヒマラヤン・ライフが組み合わされてヒマラヤがさらにより豊かに共有されていくのだと思う。

サトパント隊は、隊員の主体性を尊重し、それぞれの持てる力が良く引出され、それぞれの想いを充分に燃焼させたように思う。

サトパントは、H A Jが掲げる方向のうち、“困難の追求”にも“未踏・未知の追求”の部門にも入らないことは確かである。しかし、困難の追求の中で集積されてきた技術とタクティクス、未踏・未知の追求の中で培われてきた研究・調査・渉外の能力、各国との信頼関係などがこのサマーキャンプを安定的に支えていることも確かである。そして、サマーキャンプに結集した多様な人間たちの中から困難と未踏に挑戦する者も育てられていくのである。

H A Jに豊かなヒマラヤン・ライフが築かれるためには、このような良い循環の構造が不可欠なのである。また、このためには、自らのヒマラヤを心のうちに持ち、さらに成長させようとするメンバーの結集と隊の運営が欠かせない。

サトパント隊は、絶妙のコンビネーション・プレーでもってこれを示してくれたと言える。サトパント隊は、H A Jの組織とその会員に対してさまざまな意味での可能性と希望をあらためて認識させてくれたように思える。

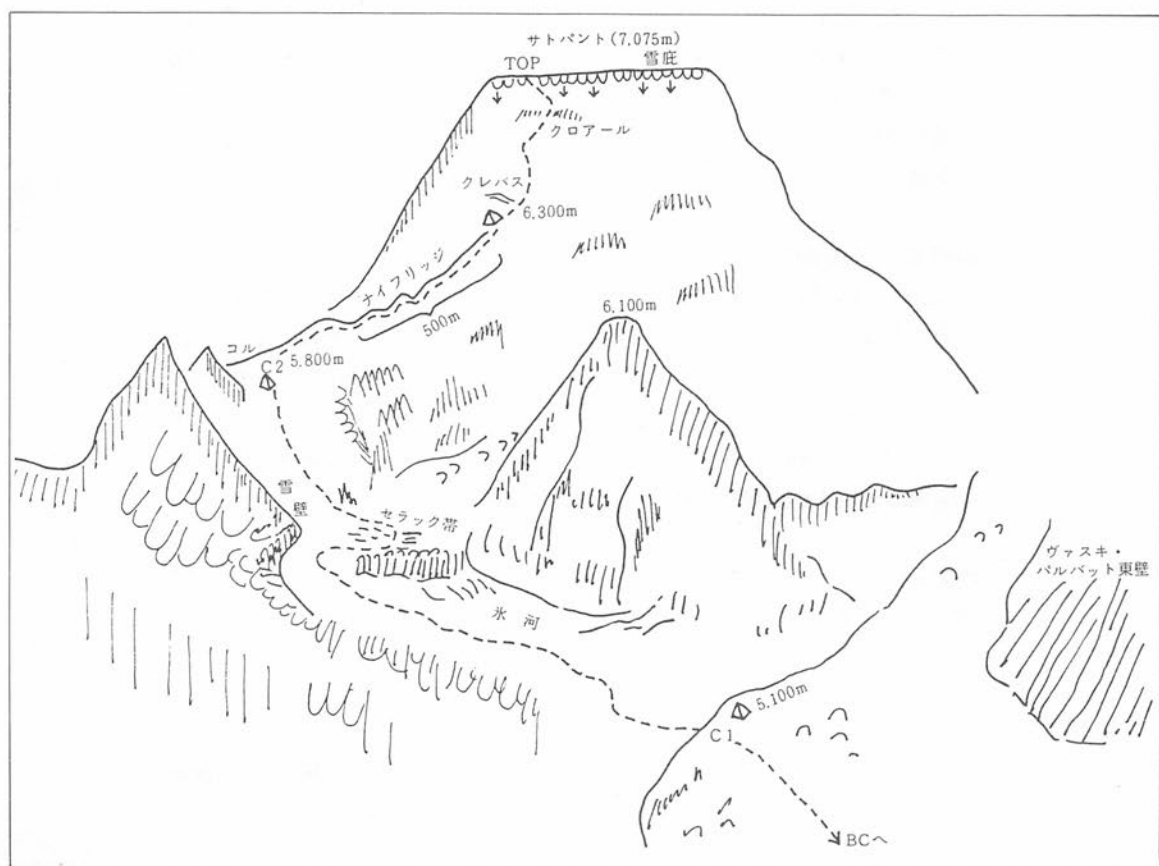
聖地の白い7,000m 峰で苦楽を共にし、悟りを開いたとまではいかないだろうが、ひとまわりもふたまわりも大きくなって帰ってきた隊員たち。彼らがこれからどのようなヒマラヤン・ライフを創りあげていくのか、どのような輪を拡げていこうとしているのか、大いに楽しみであり、期待をこめて見守りたいと思う。

1991年1月
日本ヒマラヤ協会
理事長 稲田定重

目 次

序	稲田 定重	
第Ⅰ部 登山報告		
隊長あいさつ	保坂 昭憲	10
登山計画		11
行動概要		12
先発隊デリーへ	保坂 昭憲	13
往路キャラバン	滝田 収	14
登山日誌	保坂昭憲・関根幸次	16
1次隊登頂記	関根 幸次	19
2次隊登頂記	平川 宏子	20
帰路キャラバン	後藤 文明	21
第Ⅱ部 隊員紹介・紀行		
隊員紹介		26
遠征をおえて	保坂 昭憲	32
初めての遠征に参加して	関根 幸次	32
50代の7,000 m 峰登頂	遠藤 京子	34
ガンガの聖水	天城 敏彦	35
7,000 m 峰ファースト Exp.	桶川和氣夫	36
'90 印度日記	中川 裕	37
遠征を終わって	滝田 収	38
聖地にて	桶川和氣夫	39
第Ⅲ部 隊務報告・資料		
通関・渉外顛末記	保坂 昭憲	44
食 糧	天城 敏彦	45
装 備	中川 裕	47
医 療	平川 宏子	48
ガンゴトリ山域の天気	遠藤 京子	56
7,000 m 以上の高峰の40歳以上の登頂者一覧		62
欧文要約		65
御協力者名簿		69

題字・大橋蒼馨



第 I 部 登 山 報 告

隊長あいさつ
登山計画
行動概要
先発隊デリーへ
往路キャラバン
登山日誌
1 次隊登頂記
2 次隊登頂記
帰路キャラバン

サトパントの山名について

当初「サト」が数字の 7 であるから、サトパントは 7 つの峰、ないし 7 つの道ではないかと言われていたが、先日来日した、インド・チベット国境警察 (ITBP) の J. S. ヤギ氏にうかがったところ、サトは「真理」パントは「道」、したがって、サトパントとは「真理への道」の意であると教えていただいた。われわれは真理への道をどこまで究めることができたのであろうか。

隊長あいさつ

保 坂 昭 憲

“ガンガ”と言う言葉には、「聖なる」とか、「母なる」とか「神々の」とかいう形容詞をつけて日本では呼ばれていると思う。しかし、インド（ヒンドゥの世界）では、ガンガそのものが魂をゆり動かす響きをもった言葉であり、川とカリバーとか不用の独立した存在である。

その源流がゴウムク（聖牛の口）であり、ここよりガンガが始まると言われている。そこに聳える山々が函養域となっており、すなわちガンゴトリという聖域である。

このガンゴトリ・ヒマラヤの盟主とも言われているサトパント峰は回りにシブリン、バギラティ、ケダルナート、チャウカンバ、チャンドラ・バルバット、スリ・カイルス等の峻峰を衛星峰のようにしたがえている、西部ガルワールでは唯一の7,000m 台の解禁峰であり、人気の高い山である。

このサトパント峰に日本ヒマラヤ協会が前年のヴァスキ・バルバットに続きサマーキャンプ第2弾として企画募集したのが始まりである。全国で志ありながら仲間に恵まれない人、山人生で7,000m 峰にもう一度という人など、さまざまな思いを胸に10名の仲間が集まったのが90年の1月であった。

月1回のミーティングで約半年間の短い出会いであったが、山頂でのお互い抱き合いながらの深い感動は、ドラマチックであり、その人生で一番輝いた瞬間であった。

親子ほどの年齢差（30歳）を越えたパートナー、順化できずにいる隊員にはかゆいところに手のとどくお父さんとお母さん 夜中に交換してくれた水枕とタオルの冷たさが心地良かった。人生の縮図をヒマラヤで見た、そんな遠征隊であった。

1人ひとりまた元の道をもどり、家族の待つ家路を急ぐ。しかし体と心にきざまれた思い出の絆は消えはしない。来年の夏、何年か後の夏に…… あのガンガのゴウムクのパニ（聖水）の壺をそっとふってみることだろう。さまざまな思い出とともに……。

今回の聖地巡礼の山旅で得た、悠久の大地での一難一難のスリルと労苦が、今後も続くだろう山人生とヒマラヤ行にプラスになり、各隊員の精神生活が潤いあるものになれば幸いです。

また、陰でささえて下さった方々に感謝申し上げ遅れておりました報告書といたします。御一読下さい。

登山計画

目標の山・遠征の目的

1. 目標の山

インドUP州ガンゴトリ山城
サトパント峰(Mt.SATOPANTH) - 7,075 m -

2. 登山期間

1990年7月15日～8月23日(40日間)

3. 遠征の目的

サトパント峰の登頂とガンゴトリの聖地巡礼

隊の名称・構成

1. 隊の名称

日本ヒマラヤ協会ガンゴトリ登山隊1990年
(英文名) HAJ GANGOTRI EXPEDITION1990
(略称) HGE '90

2. 主 催

日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF
JAPAN (HAJ)

3. 推進の組織

日本ヒマラヤ協会ガンゴトリ登山隊実行委員会
会 長 遠藤 登(HAJ会長)
実行委員長 稲田定重(同 理事長)
副実行委員長 保坂昭憲(登山隊隊長)
事務局 長 山森欣一(HAJ専務理事)
委 員 八木原罔明、尾形好雄、登山隊
隊員

登山隊事務局 〒169 東京都新宿区高田馬場 3
-23-1 淀橋食糧ビル 506号 日本ヒマラヤ協会
☎ 03-3367-8521 FAX 03-3367-4509
現地連絡先 c/o SHIKHAR TRAVELS(P)
Ltd. 209, Competent House, F-14,
Middle Circle, Connaught Place,
New Delhi-110 001, INDIA.
☎ 331-2444, 331-2666.
Telex: 31-62664 SHIK IN

隊 員 構 成

隊 長	保坂 昭憲	(42歳)	福島	総括, 渉外
副隊長	関根 幸次	(56歳)	埼玉	装備
隊 員	遠藤 京子	(52歳)	東京	食糧, 気象
"	平川 宏子	(50歳)	大阪	医療
"	天城 敏彦	(43歳)	東京	食糧, 記録
"	桶川和気夫	(40歳)	石川	記録
"	滝田 収	(33歳)	福島	梱包
"	南指原さゆり	(31歳)	埼玉	記録
"	中川 裕	(29歳)	埼玉	装備
"	後藤 文明	(25歳)	群馬	輸送

連絡官 ナリン・ゴータム (28歳) ヒマチャル出身
" 身、登山インストラクター

コック ラクパ・タマン (24歳) ネパール出身
" ビン・クマール (24歳) ネパール出身

キッチンボーイ コモン・バードル (19歳) ネパール出身

高所ポーター カラン・シン(21歳) ウッタールカシ出身
ビレンダール・シン(23歳) ウッタールカシ出身

エージェント、シカルトラベル社アレンジャー:
ラジュ (22歳) 学生アルバイト

サトパント峰の概要

インド最大の州、ウッタール・プラディッシュ(U P) 州の西部ガルワールの中心地、ウッタールカシから車でバギラティ河に沿って北上すると、1日の山岳ドライブでヒンドゥ教の三大聖地のひとつガンゴトリに着く。ここからさらに1日遡るとガンガ(ガンジス河)の源流であるガンゴトリ氷河の舌端が現れる。ゴウムク(牛の口の意)と呼ばれる所からインドの母なるガンガの1滴は流れ出し、ベンガル湾までの遥かなる万里行をなすのである。

このガンゴトリ氷河は、標高4,000m付近を末端高度として、その幅6～8km、長さ約25kmにも及ぶ長大な氷河を形成している。周辺にはすべての源である輪廻の世界のガンガの源頭として神聖なる山々が峻立する。

サトパント峰(7,075m)は、このガンゴトリ山域でチャウカンバ(7,138m)に次ぐ第2の高峰で

あるが、この山群の中央に位置して気高い山容を誇っている点で、サトパントはガンゴトリの盟主と言えよう。サトパントの山姿は、特徴ある梯形をなしており、四方をガンゴトリ氷河とチャトランギ氷河の支氷河に囲まれた中にドッシリと鎮座している。

初登頂は、1947年8月1日にスイスのアンドレ・ロック隊長の率いるズッター＝ローナー隊が北西稜試登の後、北稜に転進して隊長ら4名が初登頂に成功した。

その後、このガンゴトリ山域は、軍事的な理由によって外国隊の入域が禁止されたこともあって外国登山隊にとっては久しく垂涎的であった。

しかし、1979年にガンゴトリ山域が外国隊にオープンされると、この独特の風貌をしたサトパントは、ガンゴトリのオープン・ピークで唯一の7,000m峰ということもあって脚光を浴び、待ち構えていた登山隊が殺到した。そして、1981年8月25日にオランダ隊のL. レーラーら2名が北稜から34年振りに第2登に成功した。

行動概要

7月11日 先発隊（保坂、中川）12:20(A1-301便) 成田発、デリー着21:00
12日 シカル・トラベルと打合せ、荷受・書類整備、IMF、大使館挨拶等
13日 通関、デボ品装備チェック、再梱包
リエゾン・オフィサーとミーティング
14日 食料、装備買出し
15日 午前フリー、午後クマール氏と会食・本隊出迎え
本隊（関根、遠藤、平川、天城、桶川、滝田、南指原、後藤）12:20発(A1-301便) 成田発、デリー着後、先発隊と合流しジャンパス・ホテルへ
16日 9:40デリー発、ルルキー、ハリドワールを経てリシケシ着19:05分
17日 リシケシ発11:35、ウッタルカシ着19:05分
18日 生鮮食料品買出し、ネルー登山学校挨拶、13:00発、ガンゴトリ着19:00

19日 ガンゴトリ～ボジュバス(3,800m)
22日 ボジュバス～ナンダンバン(4,300m)
25日 BC(ヴァスキタル、4,800m)入り
28日 C1(5,100m)建設
8月2日 C2(5,800m)建設
9日 C3(6,300m)建設
10日 1次隊5名登頂(11:30)
11日 2次隊4名登頂(12:00)
14日 BC撤収、ボジュバスへ
15日 ボジュバス～ガンゴトリ
16日 ガンゴトリ～ウッタルカシ
17日～18日 ウッタルカシ～デリー(4:30)
隊荷整理、観光、サクセス・パーティー等ののち
21日 18:05(A1-304便) デリー発
22日 成田着8:30、解散

先発隊デリーへ

保 坂 昭 憲

ビザ発給が遅れ、出発は4日遅れの7月11日となった。成田出発には関根さんの見送りをうけて保坂、中川の両名は感謝の気持ちいっぱい機上の人となった。

デリー到着は午後9時。ジャンパス・ホテルにて夜食をとったのは午後11時となった。

いよいよデリーの仕事の始まりです。しかし、そこはインドゆえ、郷に入らばの心もこの国を旅する者にとって大切なこと……。

7月12日 晴

シカール社へ出向き、打合せと支払いを済ませた後、IMFへ挨拶に出向く。通関のための書類の整備、大使館への挨拶を行い第1日目を終了。リエゾンはチャンパに帰ったとのこと、モンスーンというのに雨のない暑いデリーでの作業も明日金曜日に決着せねば土・日は役所クローズとあって、2人分かれて作業をすることにする。

7月13日 晴

中川隊員はHAJデポ装備の再梱包のためシカール社のストールへ出かけ、コック2名とシカール社の社員と共に汗して大体の再梱包を終わる。

私はエアーカーゴ・センターにて通関をセンター終了ぎりぎりの16時半に終え、IMFへ直行する。IMFにてリエゾン・オフィサー（L・O）のナリン・ゴータム氏とブリーフィングを行い、所期の目的をはたす。

夜、リエゾンに今後共よろしくということとシカール社の2名には本日は御苦労さんという意味でコンノートのインド・レストランにてディナーを一緒にとる。

7月14日 晴

午前中に両名分かれて作業をする。中川隊員はストールで昨日の再梱包の残りを整理することと隊員用のはがき・切手の入手のために街へ出ていく。

私はスーパー・バザールへデリー調達品を仕入れにいく。リエゾンの食料の不足分をチェックさせる目的で彼とコックのラクパと共に出かける。昨日、食料調達リストをチェックしておいたので

早い。やはり生鮮野菜はウツタルカシが良いとのことである。ハムとか缶詰類はデリーでは入手が困難なようだ。足が棒になるまでコンノートを歩くが良い品がみつからず、あきらめる。（シークレットにシープをガンゴトリ・エリアでカットするという話を信じて）

午後、中川隊員と共にリエゾンを伴いキャラバン用のシューズを買いに出かける。日本では980円位と見えるもので330ルピーとのこと。この国では非常に高い感がある。本隊の酒の好きな隊員の顔を思いうかべてラム酒を5本、75ルピーで入手する。

すべてのデリーでの先発業務が終わり安心する。明日はフリーとし、1日ゆっくりすることとする。

7月15日 晴

中川隊員はオールド・デリーへ出かけていった。私はリエゾンと2人で万博会場跡とヒンドゥ教のテンプルへ出かける。ヒンドゥの神々の像と名前をチェックしながら歩くがブッタもその1人でありビシュヌの化身とのことらしい。

午後、シカール社社長より昼食の招待をうけてホスト・レストランにてリエゾンとともに食事をする。あとは本隊の到着を待つのみである。

2人の先発隊の仕事を無事終えることができホッとした感じであった。

本隊がカスタムをクリアーして21時に元気な姿をみせて、思わず「ドーモ、ドーモ」の声がかかる。

(注) IMF=インド登山財団
リエゾン・オフィサー=政府連絡官

往路キャラバン

滝田 収

7月15日 日本出発。

出発前日の夜8時には、関根、遠藤を除く本隊全員がH A J事務所に集合する。飛田さん、寺沢さん、貝塚さん、石坂さん、天城夫人が駆け付けて下さり、遅くまで盛り上げる。

二日酔いの重い体で事務所を出発。上野で遠藤さんと合流し成田へ向かう。成田に隊荷を運んで先に来ていた関根副隊長と合流する。飛田さん寺沢さん達の見送りを受け、12時20分発のA1-301便にてインドに向けて飛び立つ。

途中、バンコックに立ち寄り、21時前デリーに到着した。機内を出るとムツとする暑さに閉口する。先発隊の保坂隊長と中川隊員の出迎えを受けて、シカール社の車でジャンパス・ホテルに向かう。ホテル着22時、日本では午前2時頃の時間、体は機械的に動いているものの頭は眠っている状態だ。

遅い夕食?の後、隊長より今迄の状況、明日の予定等の説明もそこそこに就寝。

7月16日 晴 リシケシ入り。

デリー(9:40)→ルルキ(15:40)→リシケシ(19:05)

快晴で迎えた早朝のインドは気温31℃、なんとという暑さだ。

ホテルで最終梱包後、デラックスコーチとトラックで出発。バスは外見は新しく見え冷房付きかと喜んだが、「クーラー、クーラー」の要求に「Open the window」の返事。気温はどんどん上がり38℃まで上昇。

デリー市内を過ぎるとガンガの聖水を持ち返る巡礼者が目につく。これはシバ神を祭る行事でカワード・メーラといい、リシケシの手前ハリドワールから来るとのこと。この行列は次第に長くなり、数十kmにも及ぶ長蛇の列となる。このメーラ(祭)のため車は迂回路をとる。

バハドラバードで最後のアルコールを仕入れる。

沐浴で有名なハリドワールに入り、初めてガンガを目にする。その表面のおだやかな流れの中にうずまく聖流を見る。

やがて夕暮れのリシケシへ。

“リシ”とは「聖者」、「ケシ」とは「髪の毛」の意味とのこと。我々は聖域に入り、出発からようやく一息つく。

7月17日 曇 ウッタルカシ入り。

リシケシ(11:35)→チャンバー(14:30)→ウッタルカシ(19:05)

車の通行許可がおりないのか、バスが来ない。蒸し暑い外気に汗しているとボツリ、ボツリ落ちて来たと思う間もなく集中豪雨。バスが到着し車までの10m程の間に全身びしょ濡れ、車中の人になったとたんスコールはピタッと止んでしまった。

長い山岳ドライブが始まる。車はどんどん高度を上げ、何箇所か峠を越す。周辺の山の急斜面は数100mの高さにわたって段々畑が続いている。

日本を発ってからインド料理に今一つなじめなかったが、チャンバーでの昼食は割合いけた。味はアレンジによって辛さを抑えているとのこと。

バハドラバードで買ったビールも今晚の食卓に乗ると当分おあずけだ。

7月18日 晴 時々曇 ガンゴトリ入り。

ネール登山学校(11:00)→リシケシ(13:50)→ガンゴトリ(19:05)

今日は聖地ガンゴトリに入域。天城隊員はコックと2人で最後の買出しに走る。隊長とL・Oは軍、役所等へIMFよりの書類を持って挨拶に出かける。全員集まったところでネール登山学校を表敬訪問する。学校は高台の閑静な場所に建っていた。アスレチックやボルダリングがあり一時間程過ごす。

ガンゴトリへの道はガンガの流れを深いゴルジュの中に望みながら進む。昼食時に飲んだ水に当たったのか腹が忙しく動く。ガンゴトリに着いた時は下痢の状態であった。

ガンゴトリは我々外人には場違いな感じを与える程聖地の息吹が伝わってくる。目の前にはガンガの流れが10m程の滝となって落ち、水しぶきを空高く舞い上げている。このしぶきの影響か、気温はグッと下がる。下痢気味の私はトイレに忙しく

体も冷え切ってしまい、最悪の状態であった。

明日から下山までの30日間、我々10名の他コック2名、キッチンボーイ1名、ハイ・ポーター2名、L. Oとシカル社の付添人、総勢17名の生活が始まる。

7月19日 曇時々晴 ボジュバス移動。

ガンゴトリ(8:40)→チルバス(13:00)→ボジュバス(15:55)

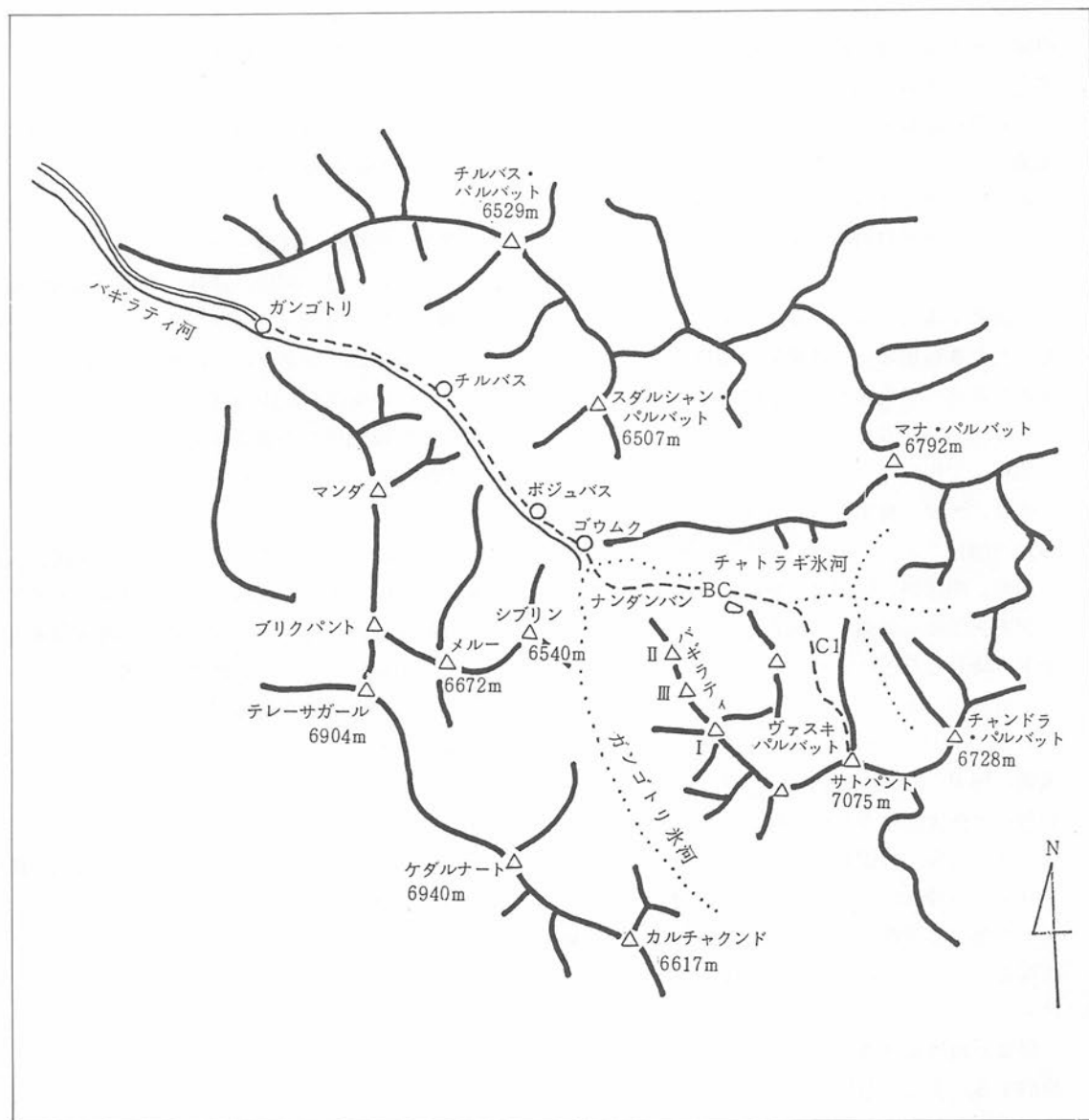
下痢はおさまったものの今度は頭痛に見舞われてしまった。ガンゴトリの高度は3,000 mである。初期の高度障害が出てくる高さである。

ガンゴトリの寺院で安全祈願と登山の成功を祈

り、ボジュバスまでの14kmのキャラバンが始まる。

キャラバン初日は天候に恵まれたものの、周辺の山々は厚い雲に包まれたままだ。正面前方にバギラティの峻峰が雲の切れ間に顔を覗かせる。

途中見かけるサドゥに、彼らの信仰への厳しい面を垣間見る。天気も上々、道も良く整備されて気分はトレッキングなのだが、久しぶりに体を動かすのと高所の影響も手伝ってか、ボジュバスのバンガローが見えた時はホッとした気分である。明日は休養日、ぐっすり眠り疲れをとりたいので早めに就寝とする。



登山日誌

保坂昭憲・関根幸次

初期順化期(全員順化してBC入りする)

7月19日 晴のち雨、曇

朝同時にスタートした隊員もマイペースで行動し、昼食時には合流し、チルバス(松のある所の意)にて、早立ちのcockが無人のバッチィ(茶店)跡にて食事を作って待っていてくれる。チャパティーとパンとチャイで食事、南指原は高山病のせいか横になり2時間眠る。途中雨にあってりしてボジュバス(白樺のある所の意)には早い中川隊員が15時、遅い南指原をエスコートする形で関根、平川両隊員が18時40分に到着した。キャラバン初期に不調だった桶川はバッチィの飲み物で復調。

ボジュバスではバンガローの別棟で、コンクリートルームはやはり冷こみマットを敷いての滞在となる。

不調者:保坂(ウツタルカシの病院より風邪薬をいただき服用する。微熱)、南指原(ガンゴトリよりスピード乗らず、胃薬にてコントロール)。

7月20日 休養日

関根、平川はゴウムクへ出かける。

遠藤、天城、桶川、滝田、中川は裏山(4,050m)へ順化トレーニング(花ウォッチング)。

保坂、南指原、後藤は宿舎にて休養。

夕方、関根が頭痛をうたえる。明日3名が馬で下へ降りることにする。

7月21日 ボジュバス〜ナンダンバン往復。

天城、平川、カラン・シン、遠藤、滝田、中川、後藤、桶川、L・Oの内前3名がナンダンバンに到着し、他は途中から引き返す。

11時、保坂、南指原はcockのラクパと馬でガンゴトリへ静養のため下山する。関根は明星ラーメンを食べて復調しボジュバスで静養。保坂は扁桃腺炎らしく肺炎にならぬように薬を抗生物質に代える。

保坂と南指原はガンゴトリの上の橋のたもとに投宿する。1人1泊15ルピー。

保坂隊長が下山していった後は、今後のタクテ

ス、その他のもろもろを考えると不安であり1日も早く復帰することを祈る。

7月22日 晴 ボジュバス(8:40)→ナンダンバン(13:00~14:50)

関根、遠藤、平川、天城、桶川、滝田、中川、後藤、L・Oは順調にナンダンバンへ移動する。カラン・シンはチャトラギ氷河右岸の道を整備してくれる。隊荷はBCへ向けて搬送。保坂、南指原はガンゴトリで静養。

7月23日 小雨 ナンダンバンよりヴァスキアル(BC)を往復し順化をはかる。

関根、遠藤、平川、天城、桶川、滝田、中川、後藤はBC往復する(10:05~15:00)。ナンダンバンは花の楽園であり、痛む頭を和らげてくれた。

保坂、南指原は復調してボジュバスへ戻る。

7月24日 曇 関根、遠藤、平川、天城、桶川、滝田、中川、後藤はナンダンバンにてレスト。保坂、南指原がナンダンバンに入り、隊員一同安心した。早い快復も高山の経験からでしょう。全員集結したので冷し中華で昼食をとる(久しぶりの日本食であった)。“インド食になれぬ隊員は涙もの”

7月25日 曇のち晴 関根、遠藤、平川、天城、桶川、滝田、中川、後藤、L・Oはアイベックスが群れ遊ぶ湖のほとりのバスケットル入りをする(8:10~11:20)。15時頃から雷とヒョウが降り、のちに集中夕立が降る。ナンダンバンからの荷物がバキラティ氷河舌端下を渡れず桶川、滝田、平川の個装が届かず。シュラフなしの夜となった。保坂、南指原はBC往復し順化をはかる。

7月26日 晴 関根、遠藤、平川、天城、桶川、滝田、中川、後藤、L・OはBCにてレスト。保坂、南指原がBC入りする。全員の体調良好にてBC入りをはたすが、南指原はまだ食欲出ず。関根、遠藤、平川、天城、桶川、滝田、中川は約1時間のコーナーヘサトパント峰と面会に出かける。

“微笑んでくれそうだ”

日本を出発し、約10日目にして目的の山“サト

パント”を見たとき、「これから、本格的登山が始まる」と眺めつくしていた。

第2期（新高度に2回トレースした者が滞在出来る。BC～C2まで）

7月27日 晴 C1偵察と荷上げ（BC7:55～デボ地9:50）。

朝ヴァスキバルバットの北面、チャトラギ氷河対岸の山の南面下部に雪が降る。BCも霜で白くなった。

関根、平川、天城、桶川、滝田、中川、後藤はデボ地へ。保坂、L・Oはデボ地点（C1の1km程手前4,930m地点）にて引き返す。遠藤、南指原はレスト。

7月28日 曇 C1（5,100m）上部偵察（BC発7:40。13:20まで行動）。

天城、滝田、中川、後藤はC1から右の沢を行き登路をさぐりながらフィックスを使用して頑張るが大クレバスに阻まれて下降する（フィックスロープ6本使用）。帰幕後、ミーティングの席で下から丸太の荷上げが必要との声も出る。

荷上げ：関根、遠藤、桶川（BC7:40、C111:20～12:20、BC14:40）。関根、遠藤はC1へデボ地よりロープをボッカ。保坂、平川、南指原はBCにてレスト。

7月29日 晴 C1荷上げ（7:50～9:30、BC14:00）

遠藤、平川は荷上げをしBCへ。保坂はC1上部の偵察、ルート工作隊に中央ルートを指示する。14:00保坂、遠藤、平川BC帰る。

C1は、左にサトパント、右にヴァスキバルバットを望む大氷床状氷河の末端のモレーンの上にあり、氷河が日々とけているのがよくわかる所である。

中川、滝田、後藤はC1移動（13:55～15:50）。前日のロープ6Pを回収し翌日のルート工作に使用する。関根、天城、桶川、南指原はBCにてレスト。

7月30日 曇 C2ルート工作。中央ルート下部2P、上部6Pをフィックスし、岩壁基部まで進む（中川、滝田、後藤）。

保坂はC1往復し、工作隊とコンタクト。関根はコー

ナーにて2時間無線待ち。14:00の交信で中川は登はん資材の不足を伝えてくる。状態は悪いらしい。南指原と平川はコーナーへ。

関根2時間寒気にさらされて風邪をひく。南指原はスロースタートにて復調か？。

7月31日 晴 C2ルート工作隊（中川、滝田、後藤）の3名は岩壁を突破し、雪壁をトラバースして大岩上のレスト・ポイントへ抜ける。6Pロープ使用。12:30にBCへ下山を開始する。

保坂、天城はC1に移動後、岩壁基部までルート工作隊とコンタクトのため登りセラック・ルートを偵察する（C111:10～岩壁基部12:00）。

関根、遠藤、平川、桶川はC1へ移動（BC10:25、C113:50）。南指原、L・OはC1往復。

8月1日 晴 C2ルート工作隊（保坂、関根）はセラック・ルートを通り、12Pフィックス工作をし、C2へ13時に抜ける。天城、桶川もロープ補給しながらC2へ到達（C17:45、C2予定地13:00、C115:00）。

遠藤、平川は不調にて岩壁基部まで順化行動。南指原、L・OはC1往復。滝田、中川、後藤はBCにてレスト。

8月2日 晴 C2荷上げ（関根、遠藤、天城、平川、桶川）。荷上げ後、関根、天城はC2上部偵察のため1Pフィックスする（C18:10～C212:10～C116:40）。保坂は帰路キャラバンのポーター・アレンジの為、C1よりBCへ下りBCからコックのラクバを伴いC1へ戻る。

C1移動：（滝田、中川、後藤、L・O、南指原）。全員C1に集結しいよいよ終盤の第3期に入る。

第3期（C2～C3建設。C2には、1泊以上の経験をし、上部ルート工作、荷上げ、または順化行動をアタック基準とする）

8月3日 晴 C2移動。関根、天城、平川、桶川はC2に移動し、2張りのテントを張る（C19:00～C214:00）。

C2は、サトパント北稜コルより2Pほど下の岩壁の基部にテントを張るが、落石と土石流の心配があり10mほど上部にテントを移動する。高所での作業は苦しい。

C2 荷上げ、下部不用のフィックスの回収を行い上部のルート工作用にそなえる（保坂、滝田、中川、後藤、南指原、L・O）。遠藤はノドが痛くC1でレストする。

8月4日 晴 C3ルート工作：関根、天城（8：00～12：00、C2 12：25）腐った雪に悩まされながら、ナイフリッジを1P登ったところで時間切れとなり引返し（計7P）、17：00にBCに下る。平川、桶川は荷上げの後BCへ下降。BC帰着は17：00。

C2移動：保坂、滝田、中川、後藤、遠藤、南指原。C2には早い人で13：00遅い人で16：30となる。L・Oは朝BCへ下山する。

8月5日 曇 視界きかず。C3ルート工作：保坂、滝田、中川、後藤。

遠藤マイペースでP1まで順化行動、ビデオカメラ1台を持つ。

保坂、滝田は重いナイロン・ロープを下部フィックスに張り替え、軽いP、Pロープをトップへ送る作業をし、P1にてトップの中川、後藤に追いつく。次いで保坂トップにて中川と2P進んだ後中川は下降。その後保坂と後藤で7Pのぼし、C3まで1P半の所でスノーバーが切れ、フィックスを3本デポして下降する。

後藤も途中トップで1P延ばし、ヒマラヤのロードに満足した様子。滝田はロープの補給を行う。3名で下山途中、遠藤と合流してC1まで下降する。中川は南指原とともにBCに下山しレストに入る。

第1小ピークよりナイフリッジが続き、雪は東側スナラヤ氷河側は軟雪となっており西斜面にスタンスをおいて登る。約10Pが今ルートの核心である。帰路、滝田隊員滑落し、フィックスロープに助けられる一幕もあり、緊張の連続である。保坂はルート工作中サングラスが飛び、下山途中から顔はむくみ、夜より雪盲となる（C3直下13：15～C2 14：45～C1 17：00、BC 20：00）。

8月6日 晴 全員レスト。

C1の4名も朝BCに下山する。保坂は目を冷やして休養。イタリア隊がBC入りする。

BCにてミーティングがもたれた。自分から2次隊でいいと言ってくれた中川に感謝し、アタッ

クの布陣は決まった。夜、イタリア隊と交歓会が持たれた。

8月7日 関根、天城、桶川は闘志を胸に秘め笑顔でBCを出発して行った（BC 13：00 C1 15：00）。

8月8日 晴のち曇 1次アタック隊C2移動。
2次隊C1移動。

C1～C2間のクレバスが開いてきており、3名以上での通過を義務づけた。

ア タ ッ ク

隊長とすれば一番悩む人選である。1次隊、2次隊。しかし今回は年齢順にならべてパートナーが80歳以上となるように組んでみると力関係もバランスのとれた良いパーティとなった。全員納得してくれたのでひとつ肩の荷がおりた。

1次隊：保坂（リーダー）、関根＝後藤、桶川＝天城

2次隊：遠藤＝中川、平川＝滝田（リーダー）
サポート：南指原

いよいよアタックである。2日間の休養の後、BCをあとしする。保坂と後藤はダイレクトにC2入りして1次隊に入った。

天候も視界はきかなかったがラッキーだったと思う。

ナイフリッジは午後には軟雪になり、3名が滑落してフィックスに助けられたこともあったので、2次隊にはC3に泊って翌日下山してもらった。

リエゾンには我々のキャパシティー不足から登頂を諦めてもらった。誠に申し訳ない気持ちです。

ここで登山日誌も登頂記に譲ることにする。



C1～C2のセラック帯

1 次隊登頂記

関 根 幸 次

8月9日、昨夜からの降雪で新雪が15センチも積もり、今日のC3へのトレースは完全に消えている。早朝、C2を出発する少し前から小雪は止み、空は明るさを取り戻した。保坂隊長、天城、桶川、後藤、関根の5名は第1次アタックメンバーとなり、C3設営と明日のアタックに備え、C2を後にする。コルからは新雪と腐った雪に足をとられ思うようにピッチがあがらない。雪稜のトレースやフィックスロープは完全に埋まり、再度のルート工作となる。雪稜はナイフリッジとなり、両側は深く切れ落ち危険な登りとなる。保坂隊長がトップでルートを延ばすが、我々4人はペースが遅れ隊長に追いつけない。改めて隊長のスーパーマンの力量に脱帽した。ナイフリッジの雪稜が終わり、C3設営予定地下部の雪壁を後藤がリード、若手の面目を保った。C3は6,300mに造り、思うようにならぬ身体に腹立ちを感じながらテントを張る。仮にこれ以上の高度で作業ができるのだろうか。エスペースに大人5人が寝ると身動きができず、酸欠も心配になる。私は小キジが近く、日本の山と同じく、テントの入口に寝る。しかし、登頂を前に興奮と疲労が重なり、横になるが寝つかれない。外は小雪が舞う天気、西から風も吹いている。何回となく外に出て、山頂を眺める。時には月明りで山頂への雪面が光っている。「どうかヒンドゥの神よ、明日は好天でありますように願います」と祈った。

8月10日、午前3時、保坂隊長のモーニングコールで目覚める。シュラフの中で健康状態をチェック、体温35度、脈拍80、頭痛なし、高度順化もベストの状態にあるようだ。しかし、朝食は和風雑炊少々とビスケット2、3ヶ食べるのみ。BCで37度の発熱以来、荷上やルート工作も順調にクリアし、食欲もあった。初めて6,300mでの泊りによる高度障害から生ずる食欲不振なのだろうか。テントの中を整理し、まだ暗い外に出る。外気は-6℃で、高度の影響か寒さは厳しく感じられる。

まばらな星空の下でヘッドランプをつけ、アイゼンを履きC3を後にする。東の空も幾分明るさ

を増し、山並が雲海の上に突出している。サトバントの山頂付近に、短時間であったが陽が差していた。C3上部クレバス帯を避け、右に迂回して昨日張られたフィックスを2ピッチを登る。初めのうちは蓄積されたエネルギーが燃焼し、身体に弾みがつき順調なスタートとなる。睡眠不足も気にせず、気分もベスト状態にあり、ラッセルで頑張ってしまう。酸素の希薄な高所での行動は、平地の何十倍のエネルギーを消費してしまう。隊員の中で弱音を吐く者もなく、もくもくとラッセルを続けている。まず高所順応、体力、忍耐、技術と種々のファクターが脳裡をかすめる。ラッセルを交代し、20~30歩で前進はストップ、雪面にへばりたくなるが、大きく深呼吸して自分をごまかしてしまう。

高度も順調に上げ、東の空から再度、陽差しが我々と雪面を照りつける。少々寒さも和らぎ、暖かさを感じる。突然に右手の小指と薬指に激痛が走る。手袋を脱ぎ指を見ると、指先が白く凍傷の第1期症状である。脇の下に手を入れ、体温で指を暖めたら、次第に痛みがとれ安心する。

C3から1時間は長く感じた1ピッチであり、日本の冬山の2ピッチに相当する時間であった。

岩が露出した平坦地で休息、東の空は黒い雲で覆われ、陽はここまで届かない。山頂は薄くたれこめるガスの中に、時折り見え隠れしている。時間の経過と共に疲労が増し、周囲の山々を見る余裕がなくなってきた。

高度が上がるに従って行動も鈍くなり、苦しみだけが全身に伝わってくる。喘ぎながらの苦しい登行だが、ラッセルされたトレースに救われる。上部露岩帯のクローアールで先頭に立ち、腰まで埋まる腐れ雪に足をとられ、5、6歩のラッセルでダウンしてしまう。眼がしらから悔し涙がボロリと雪面に落ちた。保坂隊長、後藤等のラッセルはエネルギーで、誠に羨ましい姿である。

山頂への道は厳しく、長い道のり、一步一步クリアしてこそ道が開けてくる。前方上部北面に長大な雪庇が張り出し、登行を遮るように覆って

いる。あの雪庇の奥が山頂、日本によくある「ニセ〇〇山」の類ではないだろうか。後藤、保坂、天城は東に延びる雪庇の弱点を目指し、腰までのラッセルにも負けずルートを開拓して行く。

後藤が小さな雪庇を崩しながらスムーズに越し、続く保坂隊長も同じルートを辿っていった。雪庇の上から、保坂隊長の「山頂」とのコールがかかる。みればH.A.J.のフラッグを出しているではないか。たしかに山頂に達したことの証明である。「登って来い」と隊長がコールしてきた。桶川と2人でトレースを辿り、急ぎ足で細く長い雪庇上に登った。天城、桶川、後藤と固い感激

の握手を交わす。山頂とおぼしき場所は、さらに10mほど東へ登ったところ。既に、保坂隊長はフィックスロープを引き、山頂に立っていた。頂稜はガスに覆われ視界はない。山頂に近づくにつれ、涙が出てしまう。保坂隊長とも感激の握手をするが、泣けて無言の挨拶となってしまった。今、念願の7,000m峰に立ったが、アプローチでの種々の苦労を戦いつつ、隊長始め、隊員皆様の助言、助力の賜ものと感謝する。今回の私は、総てが未知の世界であり、サトバントは何登目であろうと関係のないこと。初めてのヒマラヤ遠征で学んだ総てを大事にし、次の踏台にしたい。

2次隊登頂記

平 川 宏 子

登頂はBC出発から始まった。我々は計画に沿って、最終キャンプC3の目処がついてから、全員がBCに集結して休養となった。

登頂計画が発表された。1次隊5名、2次隊4名、内訳は関根、天城、桶川の3名は、8月7日にBCを出発して1日にキャンプを1つずつ進めて行く。隊長と後藤は、8月8日にBCを出発して初日にキャンプを2つ進んで8月9日に5名でC3を設営。8月10日5名が同時登頂の予定となる。

2次隊の構成は、滝田、平川、遠藤、中川の隊長苦心のメンバー編成となり、こちらは8月8日にBCを出発してキャンプを1日1つずつ進めて行き、8月11日に登頂の予定。悪天の場合はチャンス放棄のこと。

1次隊は8月9日、夜間の降雪による新雪と日中の軟雪に悩まされながらC3を設営。ガスの中の登頂後C2への下山と、苦労の多い登攀とな

ったようだ。

それに引き換え、我々2次隊は、8月10日のナイフリッジの通過といい、8月11日の登頂といい、気温が少し下がり(-10℃前後)、雪の締まりも具合良く、歩き易く、ラッキーであった。ゆっくりゆっくり登った頂上では、南面のチャウカンバ方面は、ガスで全く視界が効かず、北面マナバルバット方面は、ガスの間に、見え隠れといった状況であったが、我々が登って来た氷河を真下に眺め下ろすことができ、満足であった。

これも偏に1次隊の苦労の賜物と感謝し、狭くて細長い頂稜で感激した。

その上、力強く優しい若手隊員の滝田、中川との同行で心強い限りであった。

その日はC3に泊まり、翌日全員がC1に集結後BCへ下って登頂を終了した。

BCでのアルコールは、とても美味しかった。

帰路キャラバン

後 藤 文 明

8月14日 BC→ボジュバス

登頂祝で酒も飲み干し、いよいよBC撤収となる。「ナンダンバンからの氷河、やだなあ」と皆んなが言っている。しかし登頂後のウキウキした時なので、なんとなく心から言わずに、“何でもこい!”といった感じに思えた。朝からガスがかかり、小雨の降る中あわただしくバックしたボックスをポーターたちが運んで行く。ポーターの出発を見届けて、BCを出る。先に出たメンバーは、なかなかいい足取りで歩いているようだ。ナンダンバンも往路のときと違い、秋の装いを漂わせている。色とりどりの花も最後の力をふりしぼって咲いているようだった。途中、イタリア隊のBCへ挨拶によった。ガスに隠れたシブリンを想像しながら、最後に一目でもと思いながら氷河帯へ入っていく。往路と違う感じのところを通り、一部道が崩れているところもあり、さすがに氷河は動いているんだなあと感じた。そして、ゴウムクに着いた。巡礼の人たちがいて、やっと人間の居るところにきたように思えた。ここでポリタン1杯ガンガの聖水を分けていただく。さすがに手が氷りつくように冷めたい。顔を洗うと、身も心も清められた? 感じになった。ゴウムクからは道も良く、軽快に歩くことができる。しかし久しぶりに荷物を背おっての長距離歩行だけあって、さすがに疲れてボジュバスに着いた。ボジュバスには“G登攀クラブ”の宇野さんがカゼをひいたらしく療養におりていた。(BC発8:50、ボジュバス着15:30)

8月15日 ボジュバス→ガンゴトリ

今日はインドの独立記念日。朝8時、バンガローの庭で国旗をかかげ、ラジオから流れる首相の演説を聞く。本当にのんびりした国だなあと思う。そして今日はキャラバン最後の日なので、皆んななかなか出発せず、出発したかと思うとノロノロわき見をしたり……。後ろ髪引かれる思いでの最後のキャラバンになった。ふり返るとバギラティ、足もとにはガンガの流れ、そしてマンガの主人公が飛んで来そうな谷を見ながら歩く。早く

日本へ帰りたい気がするが、「もう少し、このキャラバンが続けばなあ」と思う気にもなる。こう考えるのは僕だけではなかったと思う。途中、一時流行したエリマキトカゲに会った。隊長。「おっ、これはエリマキトカゲだ」と写真を撮る。見ると30cmほどのトカゲが脱皮して首筋にカラがついているだけだった。残念? 少しずつ暑くなってくるが、バッチィで飲む熱いチャイは最高だった。

ガンガの流れを何度も見おろし、何度も振り返り、立ち止まってはカメラのシャッターを切る。本当に寂しい気分になる。そのうち木々の間からガンゴトリの街が見えてくる。そろそろキャラバンも終わる。アシュラムへよる人、バンガローへ早く着き、からだを洗い洗濯する人、本当に各自キャラバンを楽しんでおりてきたようだった。インド・スタッフとガンゴトリ・テンプルに下山報告へ行く。往路の時と違い、20ルピーぐらいおいできてしまった。それと、この夜はシカール社のアルバイト、ラジュさんの誕生日だったので、ささやかだがパーティを開いた。すごく喜んでいたのでよかった。チョコレートがけの羊かん、美味でした。(ボジュバス発8:40、ガンゴトリ着15:20)

8月16日 ガンゴトリ→ウツタルカシ

朝6時から起きてバスを待っているがまだ乗れない。現在12時30分。腹もへったし、イライラしてきた、と手帳に書いてある。ガンゴトリからはバスのキャラバンだ。しかし道路が崩れ通行止め、という事で途中までローカルバスでの移動だった。ガンゴトリは今、バスを待っている人たちでごったがえしている。待ちわびて午後1時すぎ、やっと何台目かのバスが来た。すると、我が隊のスタッフたちがバスの止まらないうちに窓に手をかけ、飛び込む準備をしている。そして、バスが止まった。すごい光景を目にした。女の子までもが窓から飛び込み、イス取りゲームをしている。天城さんと2人でボカンとしながら、その光景を見ていた。ケンカしてる人、泣いているガキ、今の日本ではちょっと見られない風景だなあと感じてい

た(ちなみに、日本人で最初に突入したのは戦後の列車事情を体験している関根さんでした — 天城)。そんなこんなで、なんとか隊員、リエゾン は座ることができた。が狭く、きたないシートでとてもつらかった。

ウッタルカシまであと2〜3時間のところで、シカール社のバスが来ていてそれに乗り換えて快適にウッタルカシへ入る。途中日が暮れた。その夕日がまたなんともいえず、テレビで見たような、地平線に沈む真赤な太陽、といったふうだった。ウッタルカシでの夕食はなんと、マトンの入ったカレーだった。ひさびさの本当にひさびさの肉というので、皆んな満足だったみたいだ。

(ガンゴトリ発13:50、ウッタルカシ着19:20)

8月17日 ウッタルカシ→デリー

今日はすごい長いキャラバンだ。気合を入れて朝6時ウッタルカシを出発したが、またもや道が崩れていて通行止め。一度ウッタルカシへ戻りひと眠りし再度挑戦。12時前に出発した。バスの中、屋根の上、荷物で一杯で、人間の方が小さくなってバスに乗っている。

「デリーに着くのは夜中だなぁ」と皆んなあんまり気にしてないというか、落ちついてる感だった。昼食のレストランでは映画をやっていて、隣の部屋は人で一杯みただった。バスに乗っているだけでも夜は来て、腹がすく。夕食はなんと、ハリドワールのチャイニーズレストランで食べた。ひさびさの中華料理、とてもうまくまたまた腹一杯食べてしまった。レストランを出てバスに乗ると、「デリーはまだまだだ」と言いながら、ラム酒がまわし飲みされる。外は日中と違いそんなに暑くなく、窓から入る風が気持ちよく、バスの窓から星を見ながら、ラム酒をあおる僕でした。関根さんは床に寝ていてふまれるし、皆んなも静かになり、僕もいつの間にか眠ってしまった。なんかすごい車内でした。デリーのジャンパス・ホテルに着いて起こされた。午前4時30分だった。2部屋に分かれ、皆んな、ドロのように眠った。こうして楽しかったキャラバンは、幕を閉じたのでした。(ウッタルカシ発12:00 → デリー着翌日 日4:30)

8月18日 デリー 雑用日

18日の朝5時に寝たのに、朝8時に起こされて、ヒマラヤ協会の尾形さんと朝食を食べに行く。さすがに皆んな眠たそう。しかし、そんなにゆっくりしてられず個人装備の整理をする。臭い靴下もシャツもそのままパッキングする。二重靴・シュラフは高いので、しっかりと気をつけて干す。さすがにデリーは暑い。昼前2班に分かれて、IMFへの報告隊とストールへのデボ装備整理隊と、各々出発する。さすがHAJの倉庫、過去の遠征を物語っているかのように、きたない。すごい暑さの中、汗だくになりながらテントを張って、コッヘルを乾して、だらだらやったら終わらなかっただろう、と思う。何が何んでも暑い1日だった。作業中飲んだカンパコーラがすごい味だった。

8月19日 デリー→アグラ→デリー

昨晚話しがまとまり今日は、アグラへ行くツアーが組まれた。バスで走ること4、5時間、ガイドを雇って観光地へお入り。物売りがドットおしよせ、頭にくるくらいうるさい。それにガイドが英語ときた。チンブンカンブンで、然々わからなかった。レッドフォード、タージマハル、まさに「すごい」の一言。暑い中でも来てよかった、と昔のインドの人に感心した1日でした。

8月20日 デリー・フリー

今日は全員、デリーで観光、ショッピングを楽しむ。ジャンタルマンタルへ行ったが、頭の悪い僕は、何が何だかわからず、頭の良い人もいるんだなぁと、感心しっぱなしの、昨日今日の2日間でした。そして夕食には、シカール・トラベル社長のクマール氏宅へ招かれ、大量に飲み、大量に食べて帰ってきた。そろそろインド料理にも飽きがきて、早く日本食が食べたい気分になる。

8月21日 デリー発

ホテルの出発が午後3時なので午前中はまだ足りない土産を買いに街へ出る。あれやこれやで目移りし、でも結局スカーフにおさまる。これがなかなか色合も良く、30枚近く買ってしまった。ホテルへ戻ると雨が降り出し、スコールになる。デリーでの雨は珍しいそうだ。

今日でインドともお別れ。本当に寂しい気分になる。まだインドにいたい気がする。しかし早く

帰って日本食、日本酒、うまい米が食べたいが、早く帰ると仕事が待ってる。仕事はつまらないし……、と頭の中が輪をかけて、おかしくなりそうだった。そんなこんなで空港へ。そこで、オーバー・チャージ30kg。一瞬顔が青くなるがさすが隊長、「OK! OK!」と係員をねじ伏せてしまう。まいりました。それから出国審査のとき、パ

スポーツの写真をしながら、「本当に、あなたですか」と聞かれたメンバーが数人いたそう。皆んな、すごい顔してたみたいだ。そしてなんとか無事に全員飛行機に乗れ、遠征の思い出、お土産をしっかりとバックして、メンバーを乗せた飛行機はインドの大きな空へ吸い込まれていきました。
8月22日 成田着 8:30。

山頂に立つ



左より、天城、後藤、関根、保坂（撮影、桶川）



滝田（左）と中川（右）



遠藤



平川



合同壮行会（7月7日、東方会館にて）



巡礼者の行列



ガンガ沿いの千枚田



街の音楽家（ウツタルカシにて）



ゴウムクにて



C 1 付近のテーブル・ストーン



ババ、アショカ・ナンディ氏と



一見インド美人。実は南指原嬢

川

隊員紹介

- | | |
|--------|---------|
| ① 生年月日 | ④ 隊務 |
| ② 住所 | ⑤ 所属山岳会 |
| ③ 勤務先 | ⑥ 海外登山歴 |

保 坂 昭 憲 (AKINORI HOSAKA)

- ① 1948年 2 月 生
- ② 〒963 福島県郡山市
- ③ 東北化学工業㈱郡山工場
- ④ 隊長、渉外
- ⑤ こまくさ山岳会
- ⑥ 1975年 ヌン (7,135m)
- 1981年 カンチェンジュンガ (8,586m) 登頂
- 1983年 ヌン (7,135m) 隊長、登頂
- 1986年 カルジャン (7,216m) 初登頂



9人の隊員をつれ、8人を山頂に導き、無事にサトパント登山を終わらせたことは、ひとえに隊長のおかげ。BCで秋田訛りで歌った“秋田音頭”は素晴しかった。多くの海外登山と8,000mの登頂を経験した秀れたヒマラヤニスト。計画から実行まで化学者らしく方程式を書き、常に「申合せ事項」を確認する慎重派。体力、判断、行動、技術と若手を尻目に難ルートをクリアしていく。小柄な中高年、どこにあの Powerful なエネルギーが秘められているのだろうか不思議でならない。サトパント峰ファミリーの家長、御苦労様でした。隊長さん「ドーモ、ドーモ」。

関 根 幸 次 (KOJI SEKINE)

- ① 1933年10月 生
- ② 〒333 埼玉県川口市
- ③ ㈱アルム化学
- ④ 副隊長、装備
- ⑤ わらじの仲間
- ⑥ 1984年 モンブラン (4,807m) 登頂
- 1987年 メラ・ピーク (6,654m)
- 1989年 台湾・玉山 (3,950m) 登頂



わらじの仲間の創立会員であり、沢登り歴40年の生涯現役を地で行く男。口に合わないインド食にも、正統派アルピニストの奥ゆかしさからかクレームをつけず、初期には体調を崩したが、明星のラーメンに救われる。以来、ザックの中には心の友ラーメンがあった。普段は温厚でも登り始めると過激な面も見せるが、周囲に気を配り、不調者には地獄に仏の有難さ。若い者とともにトップをリードし、アタック時もラッセルに汗して頑張り、隊を引きしめてくれた。今後もヒマラヤ山行を続けるとのこと、(もの忘れに気を付けて)マイベースにて御活躍下さい。

遠 藤 京 子 (KYOKO ENDO)

① 1938年 5 月 生

② 〒520 大津市

③ 主婦

④ 食糧、気象

⑤ 京都山岳会、わらじの仲間

⑥ 1968年 イストル・オ・ナール (7,403m)

隊長、登頂

1974年 マナスル (8,163m) 総指揮

1981年 ボゴダ (5,445m) 隊長、初登頂

1983年 チャンラ・ヒマール (6,563m) 隊長

1984年 玉龍雪山 (5,596m)、 1985年 クラウン (7,295m)

1986年 マッキンリー (6,194m) 副隊長、登頂、 1988年 ゲニ (6,204m) 初登頂

1989年 新青峰 (6,860m) 隊長



経験豊かで好奇心旺盛なベテラン登山家。日本の女性ヒマラヤ登山の草分け的存在。人脈、知識も豊富で準備段階から大いに活躍してくれた。上部キャンプ食は研究成果をふまえてきめ細かく配慮がされていて大助かり。キャリアとプライドをばねに、不調をおして登頂をはたす。肝臓病を克服し、今後も高所登山をつづけるという意気も立派。でも不用意な放言癖は回りを不快にさせるだけなので少々改めたほうがよいのでは。本来人を大切にする美質をもった人なのですから、御自愛を。

平 川 宏 子 (HIROKO HIRAKAWA)

① 1940年 2 月 生

② 〒572 大阪府寝屋川市

④ 医療

⑤ 大阪わらじの会

⑥ 1970年 アンナプルナⅢ (7,555m) 登頂

1980年 キリマンジャロ (5,685m) 登頂

1981年 CB13A (6,242m) 隊長、登頂

1985年 韓国・ハンラ山 (1,950m) 登頂

1986年 アコンカグア (6,959m) 隊長、登頂

1988年 ニュージーランド南島ネルソンの沢、 1989年 台湾・雪山 (3,884m) 登頂



アンナプルナⅢの登頂者で努力の人。身体にしみついた職業ナースは、つねに隊員に博愛の手をさしのべてくれた。帰路ポーターが落石を受けたときの治療の手際はみごとでした。(私ごとですが、ガンゴトリで首が回らなくなったときの、父上直伝の指圧には涙が出ました。あの指の強さと登山のひたむきさにただただ感心 — 保坂)。

積極的に酒に手を出し、登頂祝いの酒宴では、つい多弁になり、過去のロマンスを口走ったとか。愛すべき人で、多くのファンを獲得した。

天 城 敏 彦 (TAKAHIKO AMAGI)

① 1947年 5月 生

② 〒169 東京都新宿区

③ 懶有斐閣

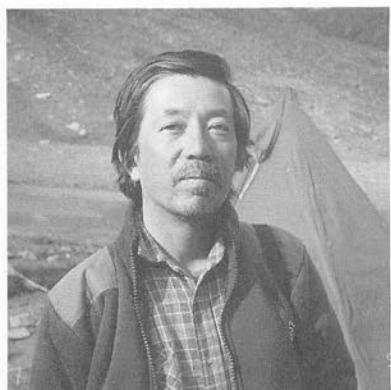
④ 食糧、記録

⑤ 同人パイネニアソブ

⑥ 1983年 ヌン (7,135m)

1986年 雪宝頂 (5,588m) 初登頂

1988年 ゲニ (6,204m) 初登頂



日頃から食卓にインド料理を取り込んでいる食糧担当には、口に合わぬものはなかったようだ。4度のHAJの遠征に参加し、雪宝頂、ゲニ峰につぐ登頂は、古傷の膝痛をおしてのラッセルによる。フルマラソンの経験もあり、ちょうどランナーズハイのように、疲労感が抜けて身体が軽くなった状態での登頂だったという。しかし下山では膝をかばって痛々しかった。お酒を愛する都会人。心はしっかり田舎人。何よりも人を安心させる術を心得ているのがいい。

桶 川 和気夫 (WAKIO OKEGAWA)

① 1950年 3月 生

② 〒920 石川県石川郡鶴来町

③ のじやⅡ

④ 記録

⑤ 金沢山岳会

⑥ 1979年 ネパール・トレッキング

1982年 インド・インドラサン・トレッキング

1986年 ニューギニア・ジャヤ・トレッキング



2児の父でありながら大いなるワンダラー。苦しいときでもニコニコしてられる、ユニークなキャラクターの人。アタック時のラッセルではよくがんばってくれた。人生の1ページ、初遠征で7,075mの登頂は自分の足で勝ちとったもの。あの食欲がすべての源であろう。「一生1度のお願い」と恋女房に許可を得たというが、はたして1度でやめられるかな。冬山登山の経験が少ないことから、かなり心ない言い方をする隊員もあったが、反論もせずひょうひょうとしていたのは心の大きさゆえだろう。

滝田 収 (OSAMU TAKITA)

① 1957年3月 生

② 〒963 福島県郡山市

③ 郡山ケミカル㈱

④ 梱包

⑤ こまくさ山岳会

⑥ 1988年 ゲニ(6,204m)初登頂



インドの風土になかなかなじめなかったようだが、ひたすら黙々と行動し、陰の立役者として荷上げにも精を出す。2次隊のリーダーとして隊員を気遣っての登頂はご苦労さん。(隊長と同じ山岳会にて、いやな役回りが多かったとしたらスマン——保坂)。

自転車のトレーニングによる体力作りで、ゲニ峰、サトバント峰と2度とも登頂し、心配していた交通事故の後遺症も出ず、本人が一番安心したのではないだろうか。何しろ7,000mで実証されたのだから。

南指原 さゆり (SAYURI NAJIWARA)

① 1959年8月 生

② 〒358 埼玉県入間市

③ ㈱建設企画コンサルタント

④ 記録

⑤ 同人パイネニアソブ

⑥ 1984年 ボルネオ・キナバル(4,101m)登頂

1986年 キンナール・カイラス(6,473m)



入山時に体調を崩し、スピードに乗れずに苦勞。食物を受けつけず回復が遅れ痛々しかったが、本人はいつも平常心を心がけ、回りが気づかうほどでもなかったかのごとく、ケロッとしていた。自然態で山に接していたのであろう。順化の後C2まではこぎつけたが、アタックには間にあわず、サポートに回り、C1でトランシーバーでアタック隊の行動を記録してくれた。2度目のインドということで、街の歩き方も、カレーの食べ方も絵になっていた。

中 川 裕 (YUTAKA NAKAGAWA)

① 1960年 8 月 生

② 〒359 埼玉県所沢市

③ ルナ・ビルメンテナンス

④ 装備

⑤ 明大駿台山岳部OB会

⑥ 1981年 ガンガプルナ (7,454m)



準備段階の事務、先発隊としてデポ品の再梱包、初期のルート工作、リエゾンの説得等々と、今遠征では一番苦勞の多い仕事をしてくれた。頭の回転が速いためか、思い込みで早トチリする場面もあり、今後の課題でしょうか。機関銃のように知識が飛び出していたのには一同感心。体力、知識も十分で、力の出せる大きな遠征隊に恵まれれば、一層力を発揮できるでしょう。それとも自分でデザインして登山するのか？ 期待しています。

後 藤 文 明 (FUMIAKI GOTO)

① 1965年 5 月 生

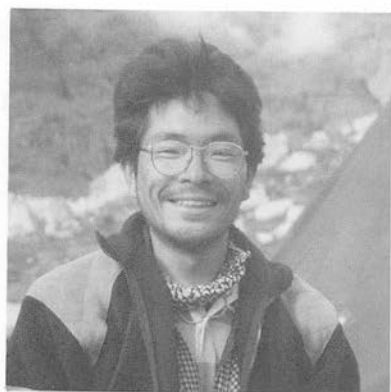
② 〒302 茨城県北相馬郡守谷町

③ 明星電気㈱守谷工場

④ 輸送

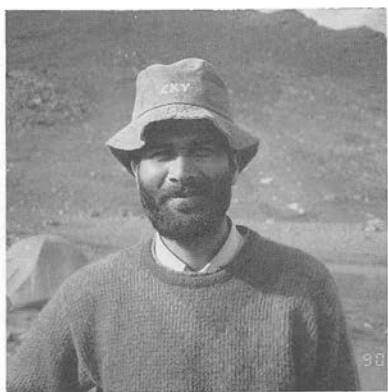
⑤ 境町山の会

⑥ 1987年 プモリ (7,161m) 登頂



最後に参加を表明した最年少隊員。準備段階でのコミュニケーション不足が心配されたが、持前の若さと吸収力でクリア。初期順化は必ずしもよくはなかったようだが、自己管理能力もあり除々に調子を上げ、荷上げ、ルート工作に頑張ってくれた。瞬発力も体力も豊かな彼を、高齢の隊員たちはうらやましく感じたものだった。皆より好かれる素直な青年で、ビッグExp. も控えており、今後の日本のヒマラヤ登山をリードする可能性も秘めている。長く見守っていきたい。

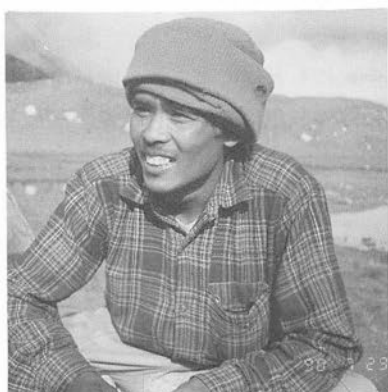
(文責 保坂、関根、天城)



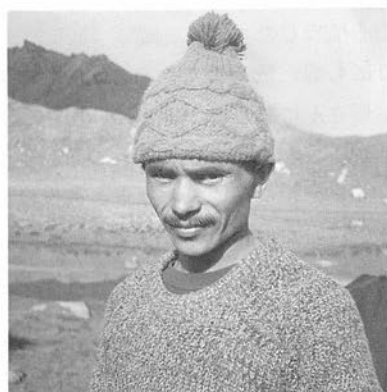
リエゾン・オフィサー
ナリン・ゴードム (28歳)
登山インストラクター



シカール・トラベル社アレンジャー
ラジュ (22歳) 学生



コック
ラクバ・タマン (24歳)



コック
ビン・クマール (24歳)



ハイポーター
ビレンダール・シン (23歳・左)
カラン・シン (21歳・右)

遠征をおえて

保 坂 昭 憲

この遠征隊は、10名中9名の登頂という成果にて終わることが出来た要因の中に、ビザ発給の遅れなど前途多難の舟出がありながら、隊員一同が状況変化の早いインドで感謝の気持ちを忘れずに対応できたことと、このトラブルでいかに多くの方の努力があって成り立っている隊であるかを認識できたことだと思う。

その人々の陰の祈りにささえられた隊であったと思う。

最近忘れがちな言葉に「遠征隊は出発できれば8割は終わったようなものだ」と言う昔の言葉が本根の心境でした。

祈りにも似た気持ちでインド大使館に通った日々、尾形さんに始まり、山森さん、田中(祥)さん、クマール氏、IMF、クエストの方、多くの方がアクションを起こしていただき、最後は稲田さんの電話が効いたと聞いております。

隊員に一言。3度目のインド遠征にて我流に遠

征論を飲みこんで、勝手に押しつけたとしたら本人の気づかないことにて容赦願いたい。

もう少しゆったりした心で楽しんでもらいたいと思うが、隊長も必死でC2ではあせっていたので思わず前に出てしまった。何だか自分がやらねばと思ってしまい…………。

ただ言えることは、チャンスは大切にしたいこととヒンドゥーの神々に“登らせていただく”ということの裏には、登る側の気構え、心構えが必要であり4,000mの初期の順化期にはのんびり構えていても熟した状態では、集中した力が必要だと思う。

ラッキーにも天候に恵まれ、隊員の謙虚な山に向かう姿勢のおかげで無事帰国できたことと今遠征隊に物心両面で協力していただいた方々に感謝の気持ちを申し上げます。本当にありがとうございました。

初めての遠征に参加して

関 根 幸 次

慌しく成田を飛び発ち、インドヒマラヤの地に近づくことになった。デリー空港には保坂隊長、中川隊員の出迎えを受ける。ビザの発給のトラブルで日本を発つのが遅れたが、隊荷の通関およびその他の用件もクリアし、明日の出発を待つばかりと聞き安心する。

翌朝、暑いデリーを逃れサトパント峰を目指す。車中から総てが新鮮な映像になり目に入り、平原から山岳へと風景は変化する。

リシケシ、ウッタルカシ、ガンゴトリとガンジス河沿いの道を、バスは喘ぎながら急坂を登って行く。狭い谷間の段々畑では日本の千枚田を思い出す。整然とした幾何学模様が素晴らしく、人々の生活の困難さを知る思いがした。そこにはガンジス河とともに生きるインド国民の、他国に敗けない信仰心の強さを改めて感じる。

今、こうして現実のものとなったヒマラヤの登

山遠征が、熱気旺盛なときにできなかったかと悔まれてならない。悔いのない人生を送ろうと、常日頃モットーにしていたが、ヒマラヤの山だけにはどうすることもできなかった。

ヒマラヤ遠征は中高年になってもできると、自分自身を慰めながら50歳が過ぎてしまった。この遠征に対し年齢と体力が最大のハンディとなることを恐れ、参加の意志も決まらず悩んでいた。参加隊員の中の遠藤、平川の両名は中高年の域に達し、今なお海外の登山に情熱を注いでいる。また、両人共に海外遠征の経験も多く、頼れる隊員である。

とくに遠藤隊員は同じ山岳会の仲間で、山行や集会でヒマラヤ遠征のイロハの話をしてくれる。「関根さん、ヒマラヤへ行きましょう。それだけの体力があれば大丈夫ですよ」と勇気づけてくれた。そんなおりに、H A Jのサトパント遠征の募

集があり、家内も「今まで遠征隊を送るばかりだったが、こんどは会から送られる身になったら…」と言ってくれた。会社も幾分安定し、社員も留守中は頑張って守りますよと言う。有難いことである。

遠藤隊員も「関根さん、7,000 m 峰を経験する絶好のチャンス、是非参加しましょう」と誘ってくれた。

私にはヒマラヤ登山の経験はあるが、遠征という大きなイベントではなかった。保坂隊長は8,000 m 難ルートของサミッターで、海外登山も数多く経験されている。サトパント峰への参加を決めたが、不安の方が先行してしまう。

1. 公募の寄集めでヒマラヤ7,000 m 峰の登山が可能であるか。
2. 隊員1人1人が未知数であり、約40日間の生活を共にできるだろうか。
3. あまりにも年齢の差があり、若い隊員と体力的に行動を共にできるだろうか。
4. 年代による、登山観、登山方法のギャップを縮めることができるだろうか。
5. 日本での登山テクニックが通用するのか。高山での氷や雪のテクニックは。自然環境の相違は。
6. 高山での生活、高山病対策等。

サトパント登山参加も数々の疑問点を残したままスタートしてしまった。しかし、前に掲げた各項目は、日本での集会や合宿を繰り返すに従って、お互に理解し合うようになった。

また合宿の中で隊員相互が知恵をだし合い、隊長の「申合せ事項」を徹底させて、不満のない遠征隊を目指す、ファミリー登山的発想がよかったと思う。

過去に海外遠征報告書は何百冊と世に出ているが、読むだけで、何やら実感として受け取ること

ができない。報告書を読むことは机上のものにすぎず、リアルに伝わってこない。

フランスの登山家で、アンナプルナの初登攀者モーリス・エルゾグの『処女峰アンナプルナ』でヒマラヤ登山の現実を知り、次々と出版される登山記を読むにすぎなかった。福島県の片田舎でヒマラヤ登山記を読んでも“用語”すら理解できなかったのを思い出す。ヒマラヤ登山記録を何十冊を読んでも“絵に画いた餅”にすぎず忘れた存在となっていた。海外の登山を志するうちに、“より困難さを求め”未知の沢登りに徹するように変化したのである。

しかし、今度のサトパント遠征は準備段階で、難関は総てアレンジされ、エスカレーターに乗った登山気分になった。実際に登山活動に入れば、総て自分の体力で行動する以外に考えられない。保坂隊長の豊富な海外登山の遠征論、登山およびインド等の知識を吸収し、自分の身体に教えこんでいった。また時には隊員からも各自の持つ経験を借り、自分が対処する難問を解決していった。

とくに氷河の登山対策、高山病および高山病以外に起こる下痢、風邪、発熱、胃炎等は、海外遠征経験隊員の的確な判断に助けられた。

看護婦経験の平川隊員のアドバイスに助けられ、ある程度自己管理できた点は有難い。

高山病、とくに頭痛に関しては初期症状で回復できたのも、日程にゆとりがあったからだと思う。今回の遠征に際し、前記のように、数々の心配ごとが山積され、頭の中は混乱し悩む毎日であった。登山活動に入り、日一日と仲間意識が強くなり最高のファミリー登山隊になってきた。お互の苦しみを乗り越えて、ひとつの山頂に協力し合って立てたことは、最大の喜びであった。保坂隊長および各隊員、この登山に御協力下さった方に厚くお礼申し上げます。

50代の7,000m峰登頂

遠藤京子

関根（56歳）、遠藤（52歳）、平川（50歳）と3人の50代隊員も、若者に混じって幸運にもサトパントの頂きに立つことができた。

山森専務理事の宣伝がよろしかったのか、ちょっとした新聞記事になったが、今年はすでにプレモンスーンの8,000m 峰シシャパンマに、京大医学部の60歳コンビ斎藤、中島両ドクターが登頂して世間をアッと驚かせた快挙があったばかりだから我々の登頂などニュースになるとは思っていなかった。ところが、山森さんの精密なコンピューターには50歳以上日本人の7～8,000m 峰登頂者はまだ6人しかインプットされていないという。列举してみると、

1. 三角朗、'88年、レーニン峰（7134m）
2. 嶋村美英江、'89年、レーニン峰
3. 井上博之、'89年、ハンテングリ（7010m）
4. 斎藤惇生、'90年、シシャパンマ（8012m）
5. 中島道郎、'90年、シシャパンマ
6. 鈴木孝雄、'90年、ガッシャブルムⅡ（8035m）

確かに50代のヒマラヤ登山はまだ珍しい現象なのだ。けれども今後はますます盛んになるだろう。運動不足、過労、飲みすぎ、栄養過多に陥りがちな危険な40代を賢い健康管理で無事に乗り越えれば、50代の高峰登山は可能だと実証されはじめたことは、働き盛りの年代には大きな励みとなる。

とは言っても、高齢者にはリスクがつきもの。1つまちがえは、大事になるのだが……。

今回のサトパント登山で高齢者の登頂が成功した要因をあげてみよう。

(1) 同年輩が誘いあって、3人連れだって参加したこと。登高スピードが遅くても仲間意識で互にかばいあえる。元気な若者の中で無理をしたり、孤独、疎外感を味わうことがない。

(2) 3人の実年組が参加した時点で、プランナ

ーの尾形さんが、登山期間を30日から40日へと長くくださったこと。BC（4,800m）までの一番重要な初期高度順化がうまくいった。3,800mで3泊、4,300mで3泊したゆとりあるキャラバン日程のおかげで、元気にBC入りできた。

(3) 尾形さんが、ハイ・ポーター2名の雇用をすすめてくださったこと。ウツタルカシの2人の若者はC2までの荷上げにパワーを発揮したばかりでなく、隊員の安全にまでよく気遣ってくれた。隊員は、ルート工作中以外はほとんど個人装備だけで上下でき、体力の消耗をおさえられた。

(4) 高齢者が、気苦労の多い隊長職や先発隊員を務めなくてよかったこと。低酸素の中で登下降することだけでも問題が多い高齢者は、気苦労やストレスを避けた方がよいと、前年の新青峰で実感した私には、実に気楽でありがたいことだった。

(5) なんとと言っても、素晴らしい若者たちと一緒に楽しく登れたことが一番の成功の要因だろう。頑張り家の保坂隊長、うまい手料理を作ってくれる天城食糧係、Clean BCに精を出す桶川隊員、いつも弱者に思いやりを忘れない中川、滝田の力強い30代パワーと、年長者の話をとても素直に聞いて積極的に吸収してゆく末頼もしい25歳、後藤君、苦しい高山病を耐えぬいた笑顔のかわいい南指原嬢、みんないい人たちだった。

(6) もう1つ付け加えるならば、50代の3人がいずれも、長く登山を続けてきて、今なお現役登山者であること。自分の体をよく知っている上に、さらに出発前には、健康診断を受けて安全を確認し、2度も富士山頂で宿泊して高度順化をしてゆく周到さ。そして現地登山中の自己管理のうまさ。とくに、キャラバン中のゆっくりした登高スピードがよかった。“Slow and Steady Win the Race”

ガンガの聖水

天 城 敞 彦

うだるような暑さのなか、10時前にマイクロバスでデリーを出発して、1、2時間たった頃だろうか、派手な装飾をほどこした天秤をかついだ人々が歩いてくるようになった。はじめは何か物売りかと思っていたが、徐々に人々の数が増えてくる。やがて彼らはガンガの聖水をくんで帰る巡礼者だと分かった。

今日通過するハリドワールという聖地で祭があり、そこから歩いてきたらしい。ここから250 kmはある。バスの中ですら37、8度はある。陽の当たるアスファルトの道はいったい何度ぐらいあるのだろうか。そこを黙々と歩いてくる。ほとんど男性、9割ぐらいはゴムゾウリか簡易な靴、1割ぐらいは裸足。飾りも小ささまざまだが、色はほぼ赤。よく見ると前後にシヴァ神などの絵と、ものを収める箱があり、その中に壺に入れた聖水が入ってるらしい。

バスは途中で混雑を避けて脇道へそれたが、ハリドワールに着くまで行列は尽きることはない。やがて夕暮れ迫まるハリドワールへ。このあたりガンジス河はかなりの水量だ。水はおよそ清流とはいえない。しかし対岸のガート（沐浴場）は、夥しい数の人々が群れている。ここで沐浴し、水をくんであやまって歩いて帰るのだろう。

彼らにとってガンガの水は尊い。家に祭って拝む。病気のときには飲む。傷につける。死に水にも使うかもしれない。ガンガの水は腐らない。

ハイドワールから上流、今回のアプローチは宗教色が濃い。車で入れる最奥の集落であるガンゴトリは巡礼たちの宿泊施設が整い、サドゥー（行者）が修行している。ガンガの源頭はガンゴトリ氷河の舌端で、ゴウムク（牛の口）といい、氷河の下を流れてきた水が勢よく噴出している。およそ日本の川の源頭とは趣きがちがう。ここにもババ（修行をつんだ行者）が暮らす。まさに聖地である。

では、ガンガにまつわる言伝えではどのようなものなのだろうか。

「昔、アヨーディヤー国に、サガラという王がいた。王には、6万人もの息子がいたが、息子たちは、聖者カピラ仙の怒りにふれて全員焼き殺された。そして、遺灰は、地中深く埋もれたままだったので、魂もつかばれずに、地下に閉じ込められていた。彼らの魂を救う道は、ただ1つしかなかった。それは、天界を流れるガンガーを地上に降下させ、その河の水で遺灰を清めることであった。ガンガーを地上に降下させようという努力は、サガラ王をはじめとして代々続けられていた。しかし、バギーラタ王が現れるまで、誰1人として、その努力を実らせた者はなかった。」

バギーラタは、サガラ王から数えて、5代目の王である。彼は、先祖代々の悲願を成就させるため、厳しい苦行に励んだ。そしてついに、ブラフマー神から、ガンガーを地上に降下させてもよいという許しを得た。

しかし、ガンガーを、なんの準備もなく降下させるには危険があまりに多すぎた。というのは、降下の際の衝撃で、地上が大混乱に陥る恐れがあったからである。地上への被害をくいとめるためには、ガンガーを受け取ってくれる者が是非必要であった。そして、この難事業をひきうけることのできる者は、シヴァ神しかいなかった。そこで、バギーラタは、再び、長く厳しい苦行に励みつつ、ガンガーを受けとめてくれるようシヴァ神に祈った。シヴァ神は、その苦行に感銘して、願いを聞きとどけた。そして、天界から降下してくるガンガーを、地上で待ち受け、髪の毛で巻き止めたのであった。

このような努力の末、地上に降されたガンガーは、地下にまでも流れ込んでいった。そして、サガラ王の息子たちの遺灰は、洗い清められ、魂も、めでたく昇天していったという。」

（『ラーマナーヤ』Ⅰ、38-43。引用は立川武蔵ほか『ヒンドゥーの神々』せりか書房、1980年、209～210頁による）

シヴァ神が天界から河の水を受けとめているところがゴウムクとなれば、それより奥はすべて天界ということになるだろうか。ヒマラヤの山々が人々によって天界と映ったのも、ガンゴトリを出発し

てすぐに、雪白き高峰を目にしたときの神々しいまでの感動を思えば容易に納得できる。ゴウムクからガンゴトリ氷河を遡るとすぐに右側にシヴァ神から名をとったシブリンがそびえ、対岸にはバギーラタ王から名を借りたと思われるバギラティが対峙する。

ガンガを地上に降ろした理由が、焼かれた王子たちの遺灰を水に流すことによって昇天させることにあったことは、今日でもインドの人々が、死

体を焼いてガンガに流すという習俗と結びついているのであろう。

流された灰はやがてベンガル湾にそそぎこみ、水蒸気はモンスーンとなってまたもとのガルワールの山々に雪を降らす。その雪が時間をかけてやがてガンガの源流の水となる。

われわれは、なんと雄大なところへ足を踏み入れてきたのだろう。

7,000m峰ファーストExp.

桶川 和気夫

サトパント峰(7075m)登頂後の帰路キャラバン中、フッと自分が風になったような一瞬があった。道端の石ころに体温を感じたり、樹々の話し声が聞こえるような気がした。

風が動くのではない

動くから風と呼ぶのだ(17. Aug. 1990)

1979年、初の外国旅行でシッキム奥地行の許可が得られず、ネパールへ転進する。ボテ・コシを遡りナンパ・ラを経て当時未解禁であった中国領チベットを覗く予定であったが、これも不許可になり、隣の谷、ドウド・コシからゴジュンバ氷河に入って近くの無名峰(5,800m)ヘシャトル・ピークと名付けて登る。雪に埋もれた最奥の氷河湖ドン・ラブシャンから望むチョー・オユー(8,201m)の輝きがいつまでも心に残り、帰国後は日本人初登頂を狙って画策する。そのトレーニングとして、1982年にインドラサン(6,221m、インド・ヒマチャル・プラデッシュ)、1986年にプンチャック・ジャヤ(5,010m、インドネシア領ニューギニア)へ出掛けるがいずれも敗退し、いつの間にか計画そのものも頓挫する。失敗続きであった。ずっと独りで行動していた報いかもしれない。

サトパント峰の山容は、チョー・オユーと似ている。ガンゴトリ山域の最高峰はチャウカンバ峰(7,138m)であるが、父なるチャウカンバ、母なるサトパントと比較形容して良いであろう。サトパントExp. はひとつのチャンスであった。しかし、自分はクライマーではなくツーリストであると思っている。体力、技術にも不安はある。チームワークスも心配だ。だが、7,000mの高さを極めることで自分をも高めはしないだろうか。悩み、迷ったが、案ずるより産むが易しであった。素晴らしいメンバーと素敵なスタッフたちのお陰で、漸くサミットを踏ませて戴くことができた。私の7,000m峰ファーストExp. にどうもありがとう。

ヴァスキタール(BC)で嘴の黄色いカラスに喜々とし、星夜、バギラティ峰の肩に掛かる月の光に涙する。沢登りや山登りをする人は、言い換えれば源流や山頂に魅せられる者は、見かけによらず寂しがりやで甘えん坊が多い。原初志向、胎内回帰本能が強く、自覚如何に拘らず、自分が未だ空気や水であった頃の思い出を忘れることができないでいる。私も、その一員であろうか。空気や水から生まれ空気や水へ還るまで、山歩きを続けたい。

'90印度日記

中 川 裕

7月8日、灼熱のデリーに居るはずの僕が、東京九段の冷房の効いた広いロビーに居た。ビザ担当のおねえさんと次におばさまと話をする。我々のビザはまだ届いていない。他の登山隊の発給状況は、の問いに、そおいえばと、おばさまがテレックスルームに行き、メモを持ってきた。それは3週間前に発給された、我々よりも後に申請された登山隊ビザであった。エージェントの話では、インド本国ではすでに我々のビザを出した、と言っているらしい。テレックスで3週間、考えていたよりもインドは遠くにあるらしい。それともインド数千年の歴史のなせる技か。

翌々日、特別措置により我々はビザを手にした。

イタリア隊の中に1人、日本人がいた。俵くん。僕と同齡、人生の半分をイタリアで過ごしたために、日本語の方がたどたどしい。彼とステファンのパーティーは、僕たちより1日遅れの12日に頂に立った。我々がヴァスキタルを離れる日、彼は1枚の紙きれに日本の連絡先を書き、帰ったらここに電話をして欲しいと僕に言った。僕は快く引き受けた。

日本に帰って2日後、彼のやさしそうな母上と電話で長い話をした。ふと、その紙きれの裏を見ると、それは、ローマ空港での買物のレシートであった。28-07-90、この日は、我々が初のC1滞在をした日である。

帰路、ローカル・バスでガンゴトリをたった我々は、ウツタルカシに着く前にシカールの「デラックス・コーチ」と出合った。バスの窓から出した僕の手と、コーチの運転席から延ばされた手とがすれちがいざまに、パチン／とあいさつを交わした。

「日本の車は、この国のラフな道には少し合わないんだ。だから僕は色々工夫をしているんだよ」。ドライバーは僕に説明してくれた。そしてそれは前輪右のスプリングが1枚折れ、大きく傾いた車体を、道端に転っていた木片で補強するという、

大胆不敵なものであった。ドライバーの技術を僕は信じていた。けれどもウツタルカシまでの荒れた山岳ロードで、時たま僕は何かを握りしめずにはいられなかった。

その日、当初の予定では朝5時にここガンゴトリを発つ予定であった。ところが、大きな荷物を多くかかえた我々は、ローカル・バスから乗車を拒否された。昼食はやたら辛いカレー、そこへまたバスが着いた。土砂崩れで足止めされていた人々がどっとそれに群がる。乗客が降りる前に窓から人が入っていく。僕はただ茫然とそれを眺めていた。すると、ハイポーターが僕を呼んでいる。あの混乱の中で、我々のシートの確保に成功したのだ。僕等も窓より車中の人となった。ここインドでは、人生はバトルである。

8月15日、昼食の後、何人かと話をしていると、コックのラクバが、「カンツァサーブ、チョット」。この前、ポーターが落石を受けたときも彼はこんな風に僕を呼び出した。一瞬ドキッとした。5分後、2人は雑貨屋のカウンターにひじを着いて考えをめぐらせていた。「エッグナイン」ラクバは悲しげな声をあげた。今日はシカール・スタッフ、ラジュ君の誕生日。お祝いをしようとラクバにケーキをたのんでおいたのだ。ところが、土砂崩れで1週間以上物資の届かないガンゴトリの街で、卵を売ってくれる店はなかった。無い知恵を絞った結果、クッキーをチョコレートでくるみ、コンデンスミルクで字を書いた。ナイフとフォークで「ケーキ」を配るラクバは「ヨクナイン」と腕がふるえなかったのがとても残念そうであった。けれどもラジュ君は、目をうるませて感激してくれた。

さあ、後はもう駆け下りるだけだ。心配されたナイフリッジも終わり、C2で軽い食事と撤収を済ませた2次隊は、前日のアタックの疲れもなんのそのBCへの下降を開始した。僕も結構重くな

ったザックを背負い歩き出した。少し下ると、イタリア隊の2名が登って来る。そして次にわが隊のリエゾン君も登って来た。出迎えにはちょっと変だな。どこへ行くんだ。サミット。え、ちょっとまで。我ながら良くぞ、と思う程に僕のハチャメチャな「英語」は途切れなかった。降りてくれ。オレハノボル、リエゾン君もゆづらなかった。C1の隊長と交信しながらの説得工作、一緒に降りよう。イヤダ、オレニカマウナ、しかたなく、イタリア隊のテントまで登り返す。そして、そこで事情を説明し、リエゾン君を残して僕は1人で降りた。ザックの重みが増していた。気がついたら3時間も話をしていた。C1には、全隊員が待っていてくれた。とてもうれしかった。夜になったら、リエゾン君もBCに降りて来た。

8月11日、12:00、2次隊も頂に達した。頂稜に出たところから、左手に20m程いった所の方が高そうなので、そこまでロープを延ばす。1次隊のトレールもそこまで続いていた。その先は、雪

底の発達したリッジが続いており、ここよりはいく分低い。振り返れば、西峰へ延びる反対側のリッジも徐々に高度を下げている。ここが頂だな、と思いながらあまり感慨はなかった。白いガス中に消えている頂稜の先が、とても気になった。

僕がヒマラヤの地を初めて踏んだのは20歳だった。それから10年を経て、踏み出した1歩の喜びを感じたのは、日本に帰ってしばらくしてのことだった。短い期間に多くのことがあり、楽しい日々であった。やはりヒマラヤはいいよな、と心より感じ、気になって仕方のなかった頂稜の彼方は、中国は四川省であったのだ、と知った今日この頃です。

最後に、とても元気であった、中高年の皆様に深く感謝します。はっきり言わせてもらって、今どきの若者より、とても、とても元気で、欲が深い皆様に負けないように、頑張っって国内に、海外に、山に登ろうと思っています。

遠征を終わって

滝田 収

最後のフィクスロープをつかみ、顔を上げると頂稜が目の前に迫ってきた。小さな雪底を乗り越すと南面の急斜面が足下に切れ落ちている。これ以上高い所はない。

2度のHAJの遠征で2度とも山頂に立たせてもらった。初めての遠征にしろ今回にしても私は隊長、そしてメンバーに恵まれた果報者だ。初めてのときは何もわからぬままに参加し、何かと教えていただき、楽しむこともできた。それは強烈な印象として残っている。そしてあの感動をもう一度、インドは素晴らしい処と聞き、できたらインドへという想いでいたときこの計画に乗った型であった。そう、まさしく乗ったのである。

今回で2回目でもあり、自分にできる仕事もあるだろうと考えていたのだが、前回のメンバーの遠藤さんと天城さんも参加すると知り、心強く感じた。そんな気やすさも手伝ってか、10人の中にあって自分は何ができるのか、初めから模索して

いる間に終わってしまった感じである。遠征は成行裡に終わったものの自分の役割は果たせたのか、そんな自己反省を強く残した。

さらに2次隊のリーダーを引き受けたものの私の力不足でその役目も果たせなかった。アタック後はC2まで下降の予定である。しかしアタックの移動時のC2で、遠藤さんより「C3に泊まることも考えられる。その分の食糧を上げる必要がある」との意見。それはアタック後にC2までの下降は高所のC3に泊まるより危険ということになり、結局2次隊はC3に泊まることになる。この判断によって2次隊は無事安全に下ることができたのである。

私にとって反省させられることの多い遠征であったが、精神的にも余裕がなく、思うように動けなかったのも事実である。

ところでインドに行った人には、そのインド観

について「インドほどおもしろく、魅力的な国はない」と言う人と「インドはどうもにがてだ、もう2度と行きたくない」と言う人に極端にその意見が分かれるそうである。

私の今回のインド滞在の場合、どちらかと言うと後者のようである。「もう2度と……」とまではいかないまでも、それほど魅力的な国とも思われなかった。

インドの一部分、それもたかだか1ヶ月余りの滞在で半月以上を山中で過ごし、言葉の障害もさることながらインド食にどうしても馴染めずにい

たからなのだろうか。

登山活動中は下に降りたくないという意識も働いた。ハイキャンプでは日本食が食べられるのである。それでもBCに降りてからは食わねば登れぬとけっこう腹に押し込んだ。

山を終わってみると他のメンバーの3kgやせた、5kg減ったとの話しに、インド食が口に合わぬといいながら私の体重はそれほど変わってはいなかった。これはいったいどういうことなのだ。

今度行くときはインドのその素晴らしさをじっくりたんのうしてきたいものだが……。

聖地にて

桶 川 和気夫

ええ、やり残したことが2つありました。インドには、ガンジスと呼ばれるとても大きな河があって、ヒンドゥ教（インド教）の人たちは「聖なる流れ」あるいは「母なるガンジス」という言葉で表しています。そして、その源流は「命の始まる場所」すなわち聖地とされて、一生に1度は訪ねるべき境界であると言われています。我々の登山隊は、この聖地を通して氷河を越え更に上流へ奥地へと向かう訳ですから、何とバチ当たりなどと言われるかもしれません。

最奥の聖地は、ヒマラヤに降り積もった雪が氷河となり、氷河末端（舌端）から解け出した水が大きな流れとなる地帯で、ゴウムクと呼ばれています。細かい砂を含む為か、源流にも拘らずその流れは濁っています。岩と氷だけの荒涼とした場所ですが、付近の洞窟や河原には行者や僧が仮住まいをし、巡礼者がよく訪れています。ここへ来て知ったことがあります。更に奥地にタポバンと呼ばれる密かな聖地があって、そこは花が咲き乱れ澄みきった小川が流れ、小鳥が舞い歌う、まさに別天地である、と。母の懷に抱かれた赤子のように、ここにいるだけで心は安らぎ、求めるべき何ものもない。天の園のように、浄土の境地のように……。

先に、やり残したことが2つあったと言いました。その1つは、タポバンを訪れることです。もう1つは、行者や僧と会ってじっくりと話を聞く

ことです。しかし、登山行動中はその余裕はありません。タポバンについては、途中で出会った日本人トレッカー池田秀一さんより、行者や僧の話については少しの時間であったが談笑できたアショーカー・ナンディ氏より、想像の翼を広げてみたい。

聖なる空間は神が欲するのではなく
人間が欲するのだ（松永伍一）

我々が登山の目標としたサトパント（7,075m）の近くに、バギラティ（6,856m）やシブリン（6,543m）と呼ばれる名峰があります。シブリンは、シヴァ神のリングム（男性器）と言う意味であり、名の如く尖った山です。タポバンは、シヴァ神の住処と言う意味であり、シブリンの山麓に実在する場所です。ちなみに、バギラティの大きなクラック（岩肌の裂け目）はヨニ（女性器）に象徴され、リングムとヨニとの合体像は生命の源泉⁽¹⁾を表すものとして付近の河原の祠に納められています。ゼロの発見はインド人によるものだそうですが「ないものが、ある」という思考は、別の意味で観念を実体化しやすい性癖を持ちます。行き着くべき所として、現実のタポバンを設定したのかもしれませんが。実際にそこを訪れた人の話を聞きました。「氷河を越えて行くんですけどね、洞窟で泊まるんです。何年前前に来た西洋人の女性が

巡礼者や旅行者の世話をしているんです。ええ、水も緑もあって、日本で言えば尾瀬沼みたいな感じかな。」

ババ（覚者）と呼ばれるアショーク・ナンディ氏は、タポバンのずうっと下流の洞窟に住んでいます。それでも、標高は3,200m、何ものにも優る水気風光の澄みきった環境の中でハッティ、ラジ、ナディ、キャン、タントラなどのヨギ（ヨガ）を修め、時折訪れる修行者や巡礼者のために洞窟のアシュラム（道場）を開放しています。我々が彼を訪ねたとき、ドイツとイスラエルの妙齡の女性が彼を師と尋ね教を仰ぎに来ていました。日本のキャンディをプレゼントすると、すごい喜びようです。食べたいと言う「果汁100%」を口の中へ入れてあげると、2人とも左の掌をこちらに向けてののです。何かなと思っていると「私たち、リングないのよ」と言われ、とても幸せな気分になりました。これが、ヨガでしょうか。深まる親愛感、ですね。

今から5000年ほど前の古代インドでは、アートマン（個我）の実在が考えられ、ブラーフマン（梵我、宇宙神）との合一が人生の目的であったと言われています。森へ入り苦行し瞑想することによって、それを得ることができると考えられました。我々の隊の通訳であるラジュさんによればそれは今も変わらず、生まれてから25歳までを学習期、50歳までを家庭期、75歳までは祈りの生活、以降は森の生活へ入るという指針があるようです。日本においても人生を四季になぞらえて青春、朱夏、白秋、玄冬と言った呼びかたをするようですが、生活指針にまでは至っていません。

我々がインドから学ぶべきものは余りにも多すぎます。一般生活において一番大切なものは、ナンディ氏にとってはピュア・オキシゲン（新鮮な空気）です。次いでピュアな光、ピュアな大地、ピュアな水、ピュアな食べ物と続きます。何のことはありません、我々が学校で習った「生物が成長する為に必要な5要素」です。彼にとって（あるいは人間にとって）は「最優先事項」であり「絶対に侵してはならないもの」の五聖⁽²⁾であり、それが「常識」なのでしょう。彼の眼から日本を見れ

ば、ゴミを拾うことが捨てないことよりも美德とされ、治療医が予防医より持てはやされるように「絶対に侵してはならないもの」が常に侵される、野蛮で未開な「非常識」の国と映りはしないでしょうか。

ヒンドゥ教の特筆すべきひとつは、墓を作らないことです。「なぜ作らないの」との質問には「なぜ作るの」と問い返されます。自然に生まれ、自然に育ち、自然に帰るのでしょう。

人は生まれたために、死ななければなりません。有限性であるが故に、永遠性を求めずにはられません。人を越えた存在、人を越えた命として求められたのが自然神の思想です。太陽、風、月、火、水、木、土などあらゆるものに神を認め、崇拝し、同化しようとしてきました。民族宗教の始まりです。司祭者、王侯、庶民、奴隷の4階級カースト制が確立されるようになると、倫理観による業思想や、輪廻、転生説、それに伴う靈魂や死後世界の実在論など、さまざまな思想が交錯するようになります。ヒンドゥ教は多神教であると言われています。創造、破壊のシヴァ神と、維持、制御のビシュヌ神に集約されますが、多くの人々が神々に祈ることは「健康、裕福で、災難に会わず、諸願が成就し、幸福な人生を過ごせますように」です。深遠な哲理や自己探求の要求はあまりありません。その頃、ブッダ（釈迦）が生まれ、やがて仏教が開花し始めました。日本とインドを繋ぐものです。今から2500年ほど前のことです。彼の思想は、明瞭で画期的なものでした。生、老、病、死の苦しみを無明（我執）と看破し、「すべてのものは因と縁によって成り立っているに過ぎない。諸行は無常であり、諸法は無我である」と縁起の理法を明らかにした。世界を外に見ず、内に観照し、あくまでも現実⁽³⁾に徹し、当時流布していた神や靈魂、輪廻、転生、死後の問題などは必要のない広い世界の提示でした。日常の幸福のために利用したり、いかに生きるかということの手段であったりした俗信が蔓延した時代の純粋な宗教の出現であったのです。

「いかに生きるか」ということをどれだけ問

うても答えは出ない。なぜなら、問いの底にある自分という自己の存在自体が問題になっていないからです。(和田綱)

ナンディ氏は、簡素な生活をして不必要なものをどんどん捨てさります。すると、最後にどうしても捨て切ることができないものが残ります。それを明らかにすることによって、寂静涅槃の境地に到ることができると言われています。一般生活において穢すべからず聖なるものは5つあって、それは先に話した5要素です。精神生活においては、1つしかありません。自己を明らかにすることのみです。日本において、この道を極めるにはどうすれば良いかという問題ですが、現在、ブッダの純粹性を保っているのは禅宗と真宗の一部にしか見られません。この僧を尋ねる以外に方法はないと思います。

我々は、氷河の割れ目をクレバスと呼んでいます。落ちたら、まず助からないでしょう。その上に雪が積もって表面が見えにくくなっているものをヒドン・クレバスと呼んで、さらに警戒します。周囲の状態からその存在を推測したり、スキーを履いたり、固定ザイルを張るなどして落ちないように注意します。しかし、ヒドン・クレバスは氷河のみではなく日常生活にも存在するようです。通俗な現世利益や幸福を願う気持ち、人を愛(執着)する心、自分の信じたいことなら何でも信じてしまう信、霊や別世界に憧れる形而上的な思いなどその底の思いがけないところに、人生のヒドン・クレバスは存在します。インドで昇華した仏教が自国において萎える理由は、人々が苦しい現実を見詰めることにより甘美な夢に酔うことを望み、選んだからに違いありません。すべてをインドからとは言いませんがインドの歴史から学ぶこと少なき日本においても今また同じことが足下に起きています。徘徊する迷信⁽⁴⁾、便利で豊かな「不必要」なものをどんどん身につける風潮、内を見ず、ひたすら外に向けての無駄なエネルギーの拡散などの傾向は熱力学的に言えばエントロピーの増大「滅亡へ向かっての発展」としか言いようがありません。かつて、インド首相であったネール氏は「急速な発展は、人々を不幸にする」と、言

い放ったようですが……。

さまざまな思いが、霧となって散っていきます。覚者との対話にて、深いまなざしを受け、優しい微笑みを感じます。キャンディひとつでふざけあえる、この気持ち。そよぐ風、樹木の葉と葉の間から差し込む陽光、まろやかな岩の感触、ほのかに立ち込める香の匂い、遠い沢のせせらぎ。ああ、この時をずっと前から望んでいたのかもしれませんが。自分が消えてしまいそうな、軽いめまいがします。何もないが、何もいらぬ。静かで暖かな、すっかり忘れていた世界だ。今、一瞬の永遠、聖地にて。

(1) 生命の源泉 日本では「金精」と称して巨大オチンチンを崇める民間信仰があります。男岩、女岩と言うのもあちこちに見られます。国は違っても人間の考えることは同じみただから、合体像もどこかにありそうです。生命の源泉を表すものとして、光や水を意味する「渦」「巴」「卍」などの文様が伝わっています。「卍」はシヴァ神の創造、破壊とビシュヌ神の維持、制御の四大力を象徴するとも言われています。

(2) 五聖 世界を構成する五大元素として、日本では地、水、火、風、空を表す五輪塔や五重ノ塔の建立が知られています。また、中国の天文易学で日、月に五行(火、水、木、金、土)を加えて七曜としたものが日本に伝えられています。別の分類では人の感情を表す五情(喜、怒、哀、楽、欲)がありますが日本では「欲」を外すことが多いようです。

(3) 縁起の理法 平家物語に「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり、沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理を顕す、奢れる者久しからず、唯春の夜の夢の如し……」と使われています。増谷文雄『釈尊のさと』(講談社学術文庫)は縁起の理法について解りやすく書かれています。ヒンドゥ教と仏教の関りについては、中村元『原始仏教—その思想と生活』(日本放送出版協会)が読みやすい。ご一読をお勧めします。

(4) 迷信 俗に「宗教もどき」と言われる加持祈祷、占相祭祀などを指します。例えば「厄参りに行けば厄除けになる」という俗信があります。裏を返すと「厄参りに行かなければ厄除けにならない」という脅迫信仰の一進化形態です。しかし、注意しなければいけないことは、それそのものは迷信でも何でもなく、そのようなことに心を惑わされることを迷信と呼ぶのです。そこに人間の弱さというものを感ずるのですが、どういう訳か男性よりも女性に多いですね。その女に惑わされるのは男です。

憧れの『ヒマラヤ征服』



雪渓を踏みしめて頂上に立つ保坂隊長⑤と関根さん（隣）ら第一次隊（保坂昭憲さん提供）

県こまく さ山岳会 保坂隊長ら快挙

アルピニストあこがれのヒマラヤのガンゴトリ山群
高峰、ヒマラヤはさまさまの主峰サトパント峰（七、
〇七五）もそのひとつ。大聖地に数えられるインド
隊長を務めた県こまくさ山
ん同市片平町字西大町、

関根幸次さん（左）山岳会
川口市芝樋ノ爪、矢吹町出
身の本県関係者三人を合
むパーティー（十人）が十、
「モンスーンの時期でした

が、天候に恵まれたのも幸
い。下山した途端に雨当
然山は雪で、私たちの第三
三キャンプはつぶされ、イ
タリア隊はほうほうの体で
下りてきた」と保坂さん。
すでに七、八千峰を征服
しているベテランのカンが
さえわたり、本県山岳史に
また新たな一ページを印し
た。

【2・3面にワイド
レポート】

『日本経済新聞』
1990年8月22日夕刊

登山隊10人帰国

サトパント峰登頂成功

今月上旬、インドヒマラヤに
あるガンゴトリ山群の主峰サト
パント峰（七、〇七五）登頂

に成功した日本ヒマラヤ協会ガ
ンゴトリ登山隊（保坂昭憲隊長
のメンバー十人がボンベイ発の
インド航空機で二十一日早朝、
成田着、帰国した。
隊員の中には関根幸次さん
（57）山岳会川口市芝樋ノ爪
一ノ二ノ二、遠藤京子さん
（52）東京都大田区南十束三
ノ一七ノ一六、平川宏子さん
（50）大阪府寝屋川市早子町
一ノ六の五十歳の男女三
人が含まれていた。同協会によ
ると、五十歳を超えて七千級
の高峰を踏破したのはこれまで
計五人で、三人が一緒にパ
ーティーで登頂したのは初めてとい
う。

第III部 隊務報告・資料

通関・渉外顛末記

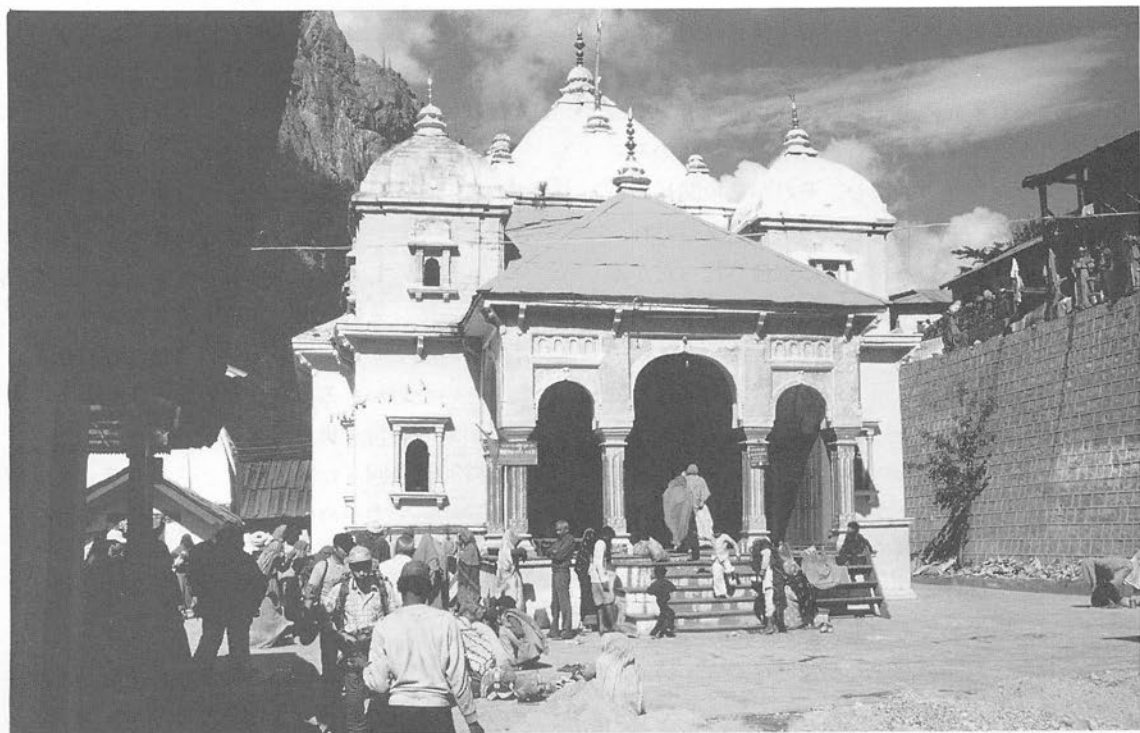
食 糧

装 備

医 療

ガンゴトリ山城の天気

7,000 m以上の高峰の40歳以上の登頂者一覧



ガンゴトリ寺院

通関・渉外顛末記

保 坂 昭 憲

1. 通関（アナカン）について

7月12日は先発隊2人分かれて作業をすることにする。シカール社のオフィスに出向き、FAXを関根さんに入れる予定だったが、シカール社ではオフィスと、ストール(店)という使い方をしているのを、こちらの一方的な理解でオフィス(事務所)＝店と思い込んで倉庫のある所へ行ってしまう、デボ品の山を確認する。

中川にデボ品のチェックと再梱包をお願いし、中川、ラクパ、ソナ、の3人に、ケロシンその他の買出しもお願いする。私は、コンノートのFAXをと思うが通関が気にかかり、まずカーゴ・ターミナルヘシンさんとサンジャさん(シカール社の社員)とともに行く。今日も1日熱い日となる。風が熱をはらんでいる。例によって、ウェイティング・アンド・ウェイティングになり、昼食前に目の前のカスタム・オフィサーの所まで隊荷が来ているのに食事となり、30分の食事時間のおくのため2:00再開。しかし、カスタム・オフィサーがウォーキ・トーキーのIMFと通信省のアンダーテキングによる許可が理解できないらしく遅々として先に進まない。フルオープンを命ぜられたが、チェックするのは1個か2個のみでオープンした荷を再梱包し、それから税関長のいるところでサインをしてもらってこいと言われ、クーラーのきいている税関長の別棟へ行ったが不在のため1時間ウェイティング。やっと会い、私のはか他の外国隊のウォーキ・トーキーを依頼に来ていた人と2人で入室(他の人は入れない)。

挨拶をし、サインをいただく。そして今度は元のオフィサーのところへもどったが、まだ理解できないらしく、オフィサー自身が税関長のところへ聞きにきて、税関長の説明で納得がいかず、それでは電話で聞けというようなことを言われ、その場で電話帳をめくる始末。われわれは外で待てと言われ、また30分がまたたく間に過ぎていく。

頭に来るが、ここでアクションを起こしてもインドであり、何ともしかたがない。

今度は理解したのだろうが、プライドあるオフィサーのこと、何を言うかわからずビクビクしながらの通関。そのうちに書類の枚数が20枚程度に増えたりして4時半を回る頃に、今まで出てくると思っていたわれわれの荷が金網の格子戸の向こうに消えて行く。もし、今日出なければ土・日が休みで出発をおくらすことになるのである。私にとって3度目のインドだが、システムが3度とも同じであることがインドらしい。

組合らしいものがターミナル内に出来ているらしく休み時間に集会をしている。しかし袖の下の廃止と機構の改革は、その人たちの生活をおびやかすことになるので変わりそうもない。通関業務はコンピューターが入っていて近代的であるが、その書類をテーブルからテーブルへ動かすだけの人もいるのにおどろかされる。

門がしまり始め、今までの倉庫代を銀行に払えと言われ、3,000ルピーを要求される。こんなことになっているとは露知らず、手持ちはなく銀行の支払窓口でシンさんは回りの兄ちゃんに金をかりて支払いをすませる。名刺1枚で見ず知らずの人から2,250ルピー(22,500円)を借りる度胸と貸す人にびっくりする。シンさんも必死である。

私はドルをルピーに換金しないでいたのがくやまれる。何がおこるかわからない渉外にまた勉強させていただいた次第。最後は灼熱の中、100メートル走よろしくビルからビルへ走って行動する。一難さって、また一難のインドカスタムクリアー。「もう時間ですから帰ります。今日は終わりました」といつ言われるのではないかと、袖の下の大きさがものを言う世界にて……。

5時30分を回った頃、やっと荷がトラックに積まれ安堵感で力がぬけてしまった感じ。荷はジャンパス・ホテルへ。

IMFでリエゾン・オフィサーとブリーフィングの約束になっており、あと15分でクローズのためとばしにとばして一路IMFへ。IMFではスタッフのチョハン氏がまだおり、リエゾン氏にも会えてほっとする。

2. IMFにて

リエゾン・オフィサーのナリン・ゴータム氏と会う。いい男っぷりである。チャンバの人で、登山のインストラクターとのこと。しかし時間は6時を過ぎており、IMFではブリーフィングを月曜にしてもらいたい旨である。やむをえないと思ったがリエゾン、チョハン氏のひとふんばりのおかげで終わることができた。サインにほっとする。

チョハン氏から、尾形さんから日本の人形をたのまれていないかと言われて、そう言えばそんな気がするの、何とかトライしますと言う（本隊にお願いする）。

1日本当に御苦労さん、ということとリエゾン氏には予定が遅れて2回も足をはこばせたこともありディナーに招待する。コンノートのインド料理の店でビールとワインをいただく。リエゾン氏

は飲まないということである（770 Rs. = 5人）。

3. リエゾン装備支給

夜、IMFからジャンパス・ホテルに来てもらい、夜、ディナーの後に帰すに忍びず、ホテルを予約させていっしょに泊ることにする。

明日、IMFへ3度目の足をはこぶことと、ジャンパス・ホテルでのミーティング等々の都合、登山期間中にイタリア隊と部分的に競合することなどもあり、今は、ビジネスライクよりも、より親密になった方がベターであろうという隊長判断である。

支給品にはことのほか気に入った様子である。

明日は靴をチェックし、トレッキング・シューズはユアセルフとしたが、隊の調達となる。

PM. 10:00. 就寝。つかれた1日となった。

食 糧

天 城 敞 彦

1. 計 画

①BC食は現地調達を基本とし、嗜好品、調味料、現地では買えそうにない素材、副食等を日本からもっていく。

②高所食は日本食を基本とし、レイション化する。

③高所食の1人1日当たり重量を650gを目安とする。

④行動食は、高所用は日本食を基本として1人1日分ずつレイション化する。BCからの行動食はチャパティー等現地食でまかなう。

⑤C1を流動的に位置付けるので、C1食もBC食の延長とする。

⑥日本からの持出し重量を100kgとする。

次に高所食のメニューを掲げておく。それぞれ4人分としてレイション化した。他に予備食、飲みもの、嗜好品をスペシャル食として配備したが、ここでは割愛する。

朝食

1	430g	2	491g
洋風雑炊		和風雑炊	
α米	240	α米	200
干えび	50	薄モチ	120
コンソメ、バター	30	干ダラ	50
チーズ(粉)	40	しそ粉	10
ゆりの花	10	小松菜(F.D.)	10
グリーンピース	10	大根おろし、かつお節	15
塩こんぶ	20	納豆(F.D.)	40
卵スープ	30	粉末しょうゆ	6
		みそ汁	40
3	650g	4	680g
ラーメン		パンケーキ	
中華三昧	400	ケーキミックス	400
ラーメンの具	20	バター	20
わかめ	10	ハチミツ	20
糸いか	20	干ぶどう	20
モチ	200	粉ミルク	20
バター		粉末卵	20
たたみいわし	20	ツナ缶	150
しその粉	5	海草サラダ	5
菊の花	5	マヨネーズ	25

昼食

1	165g × 4	2	155g × 4
サラダブリッツ	25	バターブリッツ	40
南部せんべい	30	カルシウムせんべい	10
ベビーサラミ	15	チーズ	20
アーモンド小魚	5	アーモンド小魚	5
1口ゼリー	30	1口ようかん	30
干あんず	0	干あんず	30
飴A	10	飴A	10
飴B	10	飴B	10
カルシウムせんべい	10		

3	155g × 4	4	155g × 4
細長ビスケット	40	サンドビスケット	20
カルシウムせんべい	10	カルシウムせんべい	10
チーズたら	20	チーズたら	20
アーモンド小魚	5	アーモンド小魚	5
1口ようかん	30	1口ゼリー	30
干あんず	50	干あんず	50
		南部せんべい	20

夕食

1	1134g	2	1181g
豆御飯とコロッケ		わかめ御飯とビーフン	
{ α米	480	{ α米	480
{ グリーンピース	40	{ わかめ	10
{ マッシュポテト	120	{ ビーフン	160
{ 小麦粉	40	{ ラーメンの具	20
{ コンビーフ缶	300	{ P缶えび	200
{ ニンニク	50	{ みそ汁(きぬさや)	40
{ ケチャップ	24	{ 高野どうふ	80
{ 海草サラダ	10	{ かつお節	10
{ 塩こんぶ	20	{ 粉末しょうゆ	6
{ コンソメスープ	20	{ ツナ缶	150
{ ゆりの花	10	{ マヨネーズ	25
{ 塩・バター	20	{ 塩	

3	1056g	4	857g
かに寿し		五目めし	
{ α米	480	{ α米	240
{ 寿し太郎	170	{ ジフィーズ五目飯	260
{ 錦糸卵	40	{ P缶あさり	110
{ 焼のり	10		
{ P缶かに	200	卵焼	
{ たたみいわし	40	{ 粉末卵	50
{ 卵汁	20	{ だし汁	5
{ ゆりの花	20	{ 塩・粉末しょうゆ	6
{ ほうれんそう	20	{ ひき割納豆	40
{ ごま	10	{ 粉末しょうゆ	6
{ 粉末しょうゆ	6	{ みそ汁(ほうれん草)	40
{ 紅しょうが	40	{ つけもの	100

2. 結果と反省

①計画段階ではC1を流動的にとらえていたが、現場を見て、地形的・距離的に判断した結果、キャンプ展開に加えることとし、急遽BCで材料をかき集めたが、そのためラーメン、もち等がBCで不足がちとなった。

②ハリドワール以北が聖域であることもあって、肉類の調達ができず、台湾製の燥肉2kgと、高所食のコンビーフだけとなってしまった。魚の缶づめ、卵、ミルク等があるので、栄養的に問題はないが、少々さびしかった。そのため登頂祝いに来てくれたイタリア隊差入れの燥肉が大変美味だった。

③メンバーが多様だったこともあり、現地食になじめない人、あるいは初期順化に苦労して食が進まない人もいた。ところが食担の私は、胃袋と味覚が大ざっぱなのか、何でもうまく食べていたこともあって、食べられないメンバーの苦しさに鈍感であったようだ。もっとバラエティに富んだ献立をを考えるべきであったと反省している。

④上のこととも関連するが、BCのスペシャル食を、管理の必要なものと、自由に食べていいものとに分けて袋に入れておいたが、遠慮深い隊員はなかなか手を出しにくかったようだ。キメ細かさが不足していた。

⑤酒は、出発時に成田で各メンバーが1本ずつ買ったウイスキー、ブランディー、先発隊がデリーで買ったラム酒数本、日本から送った日本酒2升、優秀なメンバーが持ちこんだ隠し酒少々であった。ハリドワール以北はドライエリアで全く酒類の調達がきかないため、少々不安であったが、往路キャラバン、登山活動中は、1、2人の例外を除いてみなあまり飲まなかったこともあって、みごとに過不足なくもたせることができた。今回唯一食担が自満できることだった。食担よりも酒担の方が適職であったのかもしれない。

⑥アタック前の休養中に、手巻ずしを食べた。具は缶づめのカニ、シャケ、ツナ、梅ぼしのたたき、納豆、卵焼き、つけもの。とても美味だった。

⑦コックのラクパはよく気のつく、これまで何度か日本隊の下で働いてきたすばらしい青年だが、そのためか、味付けを日本人向けにと思ってか、

スパイスを控え目にしていたようだ。個人差はあるだろうが、私にはなんとなく中途半端で物足りなく感じていた。

⑧最後に、ウツタルカシで買った生鮮食糧品の1kg当たりの単価を掲げておく。何かの参考になれば幸いである（1Rs=約10円）。

ジャガイモ	4 Rs	ナス	5 Rs
タマネギ	4	ショウガ	20
キャベツ	6	ニンニク	16
オクラ	15	トマト	12
キュウリ	10	バナナ	8
大根	9	オレンジ	8

装 備

中 川 裕

サトパントを北稜ノーマルルートから8月に登る。メンバーは10人。この課題に対して、今回我々の準備した装備は及第点にはわずかながら足りなかった。しかしながら、天の恵みか、なんとか間に合うことが出来た、というのが、係として率直な感想である。

我々が用意した主要装備を別表に示した。

まず、登攀用の消耗品はそのほとんどを消費した。固定ロープはルート上に残置された過去の隊のものを200m以上はずし、張り直して使用した。当然支点も不足し、テント用と考えていたものや、他隊のものもアンカーとして使用した。支点の使用状況は、セラック帯までがアイスハーケンとスノーバー、セラック帯からC2直下までがアイスハーケン、C2以上をスノーバーというものであった。日中、氷河の表面を水が流れるために、アイスハーケンはすぐにゆるんでしまい、翌日には手で抜けるような状態であった。

固定ロープは主にpp8φで、50mに切って使用した。遠藤隊員が持ってきてくれた“ダイニーマ”ロープ6φは、軽く、強度もあるのでアタック時に使用した。

コンロはBCを石油、上部をEPIとした。C1の重要性が日本で考えていたよりも増したためボンベの数に不安を感じたが、BCで調理済みのものを上げる、ランタンを使わない、というスタート時の努力もあってか、結果としてボンベはあまった。

テントはHAJのデリー・デボ品を使用した。C2、C3はエスパース、下部はエスパース、マイクロドーム、ダンロップ、メスナーテントを使

用した。マイクロドームは、シームから水が漏れフライを使用した。張りやすさ、広さ、そして空間の合理性からいってエスパースが最も快適であった。

酸素は医療用として、BCはボンベ、上部キャンプはミドリ安全のO₂パックを用意した。結構重いの、C3には不必要ではないか、という意見もあったが、もしもの時には一番役に立ってくれるので、C1～C3に1セットずつとキャンドルを2時間分配置した。

リエゾン用支給品は別表のものを用意し、各々贈与、貸与として、デリー出発前に伝えておいた。基本的に身に着ける物は贈与し、隊員の個人装備と比べて、あまり落差が生じないように多少配慮した。

個人装備は、日本の冬山装備で事足りた。実際アタック時以外はそれ程寒さは感じなかった。ゴアテックスの雨具で登った隊員もいる。

インドヒマラヤの登山で、エージェントの存在を忘れるわけにはいかない。今回、その責任の範囲について、多少の認識のズレがあった。結果として我々は必要のないものを持って行ってしまった。インドは契約社会である。また、デリーは大都市である。日本を出る前に、あいまいな点は問い合せた方がよい。英文でなくとも、リストなどでこちらの意志を表すのもいい手である。とにかく暑いデリーで仕事の量は少ないにこしたことはない。また、デリーで手に入るものを、金をかけて日本から持っていく必要もない。

今回、BCでのメステントおよびインド人スタッフのテントはエージェントが用意した。食事もBCまではすべて彼らが調理した。ただ、BC以

前で不調者が出た時を考えて、簡単な日本食を作る準備くらいはしておいた方が良いと思う。

主要装備リスト

登攀具			残
pp	8φ×50m	29	0
ナイロン	8φ×50m	10	1
ダイニーマ	6φ×50m	6	6
ザイル	9φ×50m	1	1
スノーバー	60cm	56	0
	40cm	14	4
アイスハーケン		20	0
ロックハーケン		10	4
幕営具			
エスパース	4・5人用	7	内張は3
	2人用	1	LO用
マイクロドーム	4・5人用	2	
ダンロップ	5・6人用	1	
メスナーテント	3・4人用	1	
その他			残
EPIコンロヘッド		6	
カートリッジ		90	25
酸素ボンベ		2	
O ₂ パック			
ホルダー		3	
キャンドル		12	

リエゾン装備

P贈与 R貸与		
ヤッケ上・下	P	ICIかぶり式
ミトン	Used P	
ロングスパッツ	P	
サングラス	P	
日出帽	Used P	
毛靴下	P	
運動靴	P	
ジャージ上・下	P	
傘	P	雨具として
ザック	P	
ピッケル	Used R	
アイゼン	Used R	
ユマール	Used R	
毛下着	P	
セーター	Used P	
テルモス	P	
シュラフ	Used R	
ヘルメット	Used R	
ハーネス	Used R	
シュラフカバー	Used P	
毛手袋	P	
登山靴	Used R	

医 療

平 川 宏 子

今回のパーティは、北は福島県から、南は大阪府まで、年齢も20代から50代までの男女混成による、幅広いメンバー構成となった。その上、メンバーの中には、肝炎、頭蓋骨骨折、椎間板ヘルニア、凍傷、半月板損傷などの既歴のある者が、10名中5名であり、そういう条件下で、医者の同行のないことは大変不安であった。

しかし全員が、海外登山の経験があり、全員5,000m以上の高度を1回以上経験していた。そこでヒマラヤ登山で一番問題となる、高度障害については、できるだけ知識を殖し、現地で健康チェック表を記載することとした。あくまで自己

管理に期待したのである。

1. 出発までにしたこと

- 東京都山岳連盟主催の「高所順応研究会」に全員出席、高所順応の実際と経験談を聞いた。
- 「高度障害予防について」勉強会をした。
- 高所順応を重視したタクティクスとして、新しい高度へは2回登って、3回目に宿泊する、ファイナルキャンプ設営後、BCへ下って、休養をとった後、アタックする、という基本線を確認した。
- 健康診断（各自受診）

5. 予防接種

γグロブリン注射（A型肝炎既応のある2名を除いて全員施行）

コレラの予防注射（希望者のみ4名施行）

6. 各自、持病（特に虫歯）、要治療の病気は治しておくようにすること。

7. 医薬品の準備（大部分、隊員の知人の協力で集めることができた。一部購入）

隊員の体格、血型、安静時脈搏

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
年齢(歳)	56	52	50	43	42	40	33	30	29	25
性	男	女	女	男	男	男	男	女	男	男
身長(cm)	165	153	165	167	162	162	163	154	167	165
体重(kg)	62	48	48.5	61	66	59	58	50	57	63
血型	A	A	B	A	A	A	O	B	A	O
脈搏/分	53	70	64	62	61	79	62	63	60	70

2. 現地での様子

気温37℃～38℃の暑熱のデリーから、3日間を要して、バスの終点、高度3,000mのガンゴトリ入り。バスの最終日、山中を走る車中は、徐々に肌寒くなり、ガンゴトリ到着時は、バギラティ川の滝しぶきの下の場所という、宿舎の立地もあり、急に寒くなり、翌朝半数の者が体調を崩す。

その中のH隊員は3790mのボジュバスへの道中、眠気、胃痛、疲労感で、思う様に歩行が捗らず、ロッジでは、発熱、食欲不振、吐気、嘔吐を来す。一昼夜絶食にて復調。

E隊員は、ウツタルカシからの感冒が悪化、咳がひどい上に、高度障害の頭痛がプラス、ロッジに1泊後、復調したH隊員と共に騎馬にて、ガンゴトリへ引き返し、2泊後、ボジュバスに戻る。

またA隊員は、ボジュバスにて、発熱、下痢を来す。1日休養にて回復。BC設営後は、D隊員の前脛部の打撲傷、E隊員の雪盲（ルート工作中、サングラスを落とした後、半日行動）などがあった。また他の隊員も、軽い頭痛、感冒症状、下痢などを来すが、大事に到らず何よりであった。

3. ポーターに関して

エージェントまかせということで、あまり考慮

に入れていなかったが、頭痛、胃痛などの訴えがあり、薬を渡した。

また最後の荷下げでは1名が落石を受け、左胸部、左下肢を打撲、大さわざとなる。胸部の方は呼吸の度に疼痛がある様子、外傷はないので湿布薬を貼り、絆創膏固定。左下肢はすり傷程度、緊急を要するようでないで、翌朝、馬で下山してはどうかということになる。しかしボジュバスに到着すると、どうも徒歩で下りて来たようであった。

医薬品リスト

	薬品名	総量	日数分	使用量
抗生物質	ケフラール250mg錠	90錠	22日分	46錠(11日分)
	エリスロシン100mg錠	220錠	22日分	80錠(8日分)
	ベングロブF 250mg包(合成ペニシリン)	90包	30日分	57包(19日分)
	セフスパン	26錠	13日分	4錠(2日分)
抗菌剤	タリビット100mg錠	60錠	20日分	33錠(11日分)
鎮痛剤 解熱剤	パフファリンA	24錠	12回分	13錠
	セデスG	29包	29回分	2包
	ボンタール	6錠	3回分	0
	ランツジール	20錠	20回分	0
	ドイリン坐薬	10錠	10回分	0
感冒薬 鎮咳剤	PL顆粒	200包	50日分	200包
	クトレス(咳止め)	30錠	10日分	3錠
	トローチ	24錠		24錠
胃腸薬 腹痛薬	ブスコバン	10錠		0
	センロック	100包		各自に渡した
	セブニーP(脂肪消化)	100錠		100錠
	総合胃腸薬(4種類)	各84錠	28日分	14日分
	〃(調合薬)	11包		11包
ビタミン剤	新ボボンS	300錠		300錠
下痢止め	正露丸	500錠	166回分	500錠
	ワカ末F	200錠	100回分	200錠
	下痢止め	10錠	5回分	0
利尿剤	キササゲ5g包	70包	70回分	66包
	ダイヤモックス	10錠		0
睡眠剤	ハルシオン	12錠		0
点眼剤	フラビタン点5ml	13本		1本
	タビリット点5ml	1本		0

	薬品名	総量	日数分	使用量
軟膏	デントシン軟膏10g	1本		0
	インテバン軟膏25g	1本		少々
	レスタミン軟膏25g	1本		使用した
	リンデロンVG軟膏5g	1本		使用した
測定器材	血圧計	2台		使用した
	体温計	各自1本		使用した
外科材料	ミルトックス湿布薬	5包	10枚	8枚
	マキロン 70ml	1本		0
	イソジンゲル 90g	1本		使用した
	オキシフル 100ml	1本		0
	ガーゼ	12包		使用した
	サビオ	145枚		使用した
	絆創膏(1cm, 2cm巾)	2巻		使用した
	〃 20cm巾	1巻		使用した
	三角巾	2枚		0
	包帯	4巻		使用した
	綿棒	100本		使用した
	鉗子	1本		0

4. 医薬品について

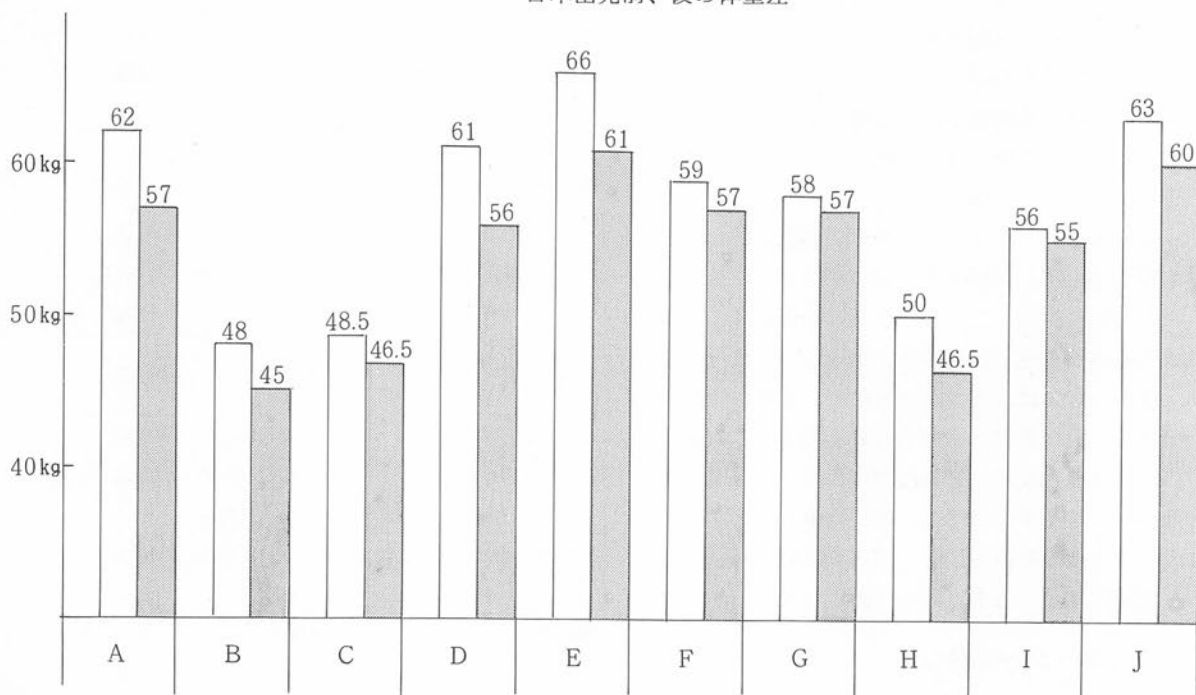
医者の同行がないので、自分たちで使用可能な薬品とした。したがって注射薬、手術器材は一斉持参しなかった。

感染症に対する抗生物質、胃腸障害への薬に重点を置いた。高度障害の緩和への薬として漢方薬キササゲを使用してみた。また、持病薬、現在治療中の薬、よく罹患する病気の薬は、各自持参してもらった。個人袋として、フラビタン点1本、胃腸薬10包、サビオ7枚、正露丸40錠、ワカ末F16錠、PL顆粒3日分を渡した。

5. 体重について

日本出発前後の体重差を表にしてみた。登山前後のものではないので、正確な体重減少量ではないが、全身体重減少を来している。平均 3.05 kg の減少である。高度障害が強く一時期、食慾のなかった隊員1名を除いて、若手の方が体重減少が小さく、年配の方が体重減少が大である。実際の

日本出発前、後の体重差



登山による体重減少はもっと大きく、BC下山後、2日間のトレッキング、2日間のバスの生活、街の生活の間に、旺盛な食慾で、大いに体重を回復した結果が帰国後体重になっていると思われる。

6. 血圧について

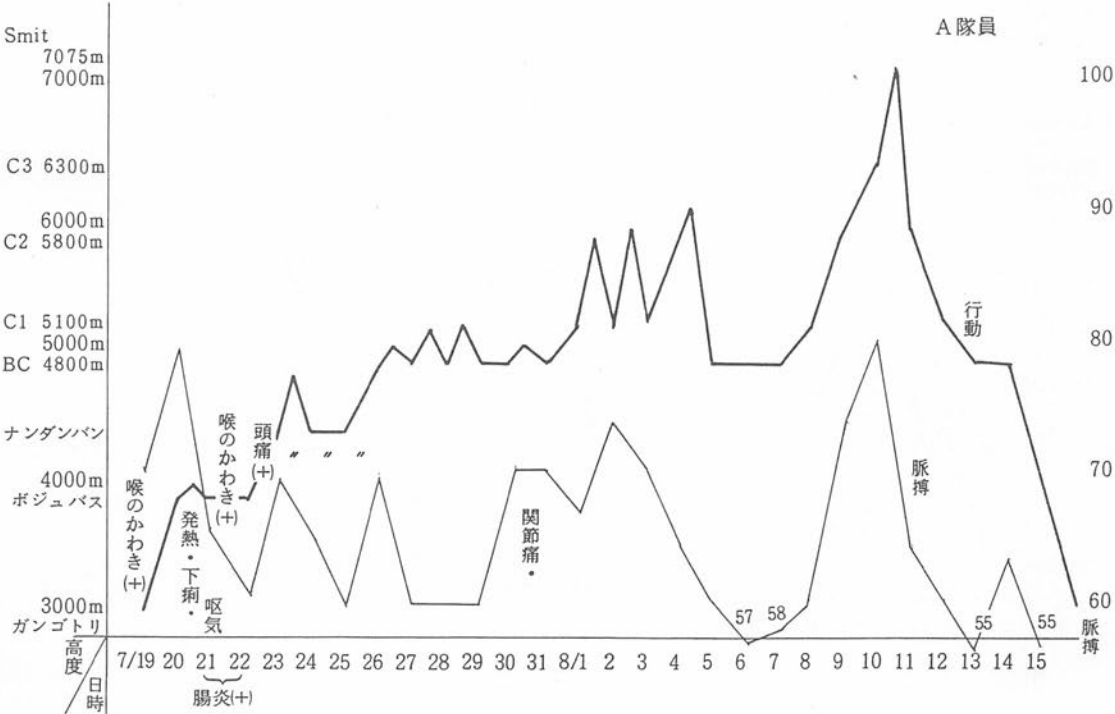
東京では6月2日に測定、ガンゴトリでは暑熱

のデリーから、急に寒くなり、全員の血圧が東京より上昇している。とくにE隊員は不調だったことが血圧にも現れている。しかしナンダンバンでは全員落ち着いて、数値になって来ている。BC、C1では普段より少し高めである。下山後のボジュバスでは全員記入していないが、10名中9名が測定、全員が最低血圧が上昇していた。

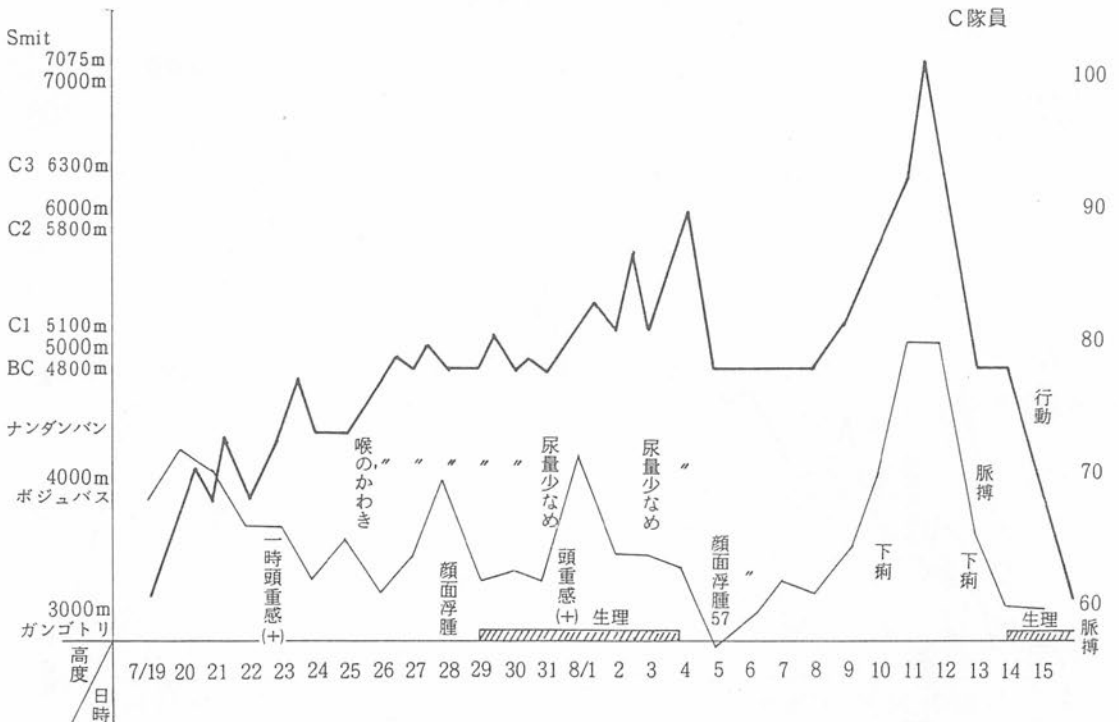
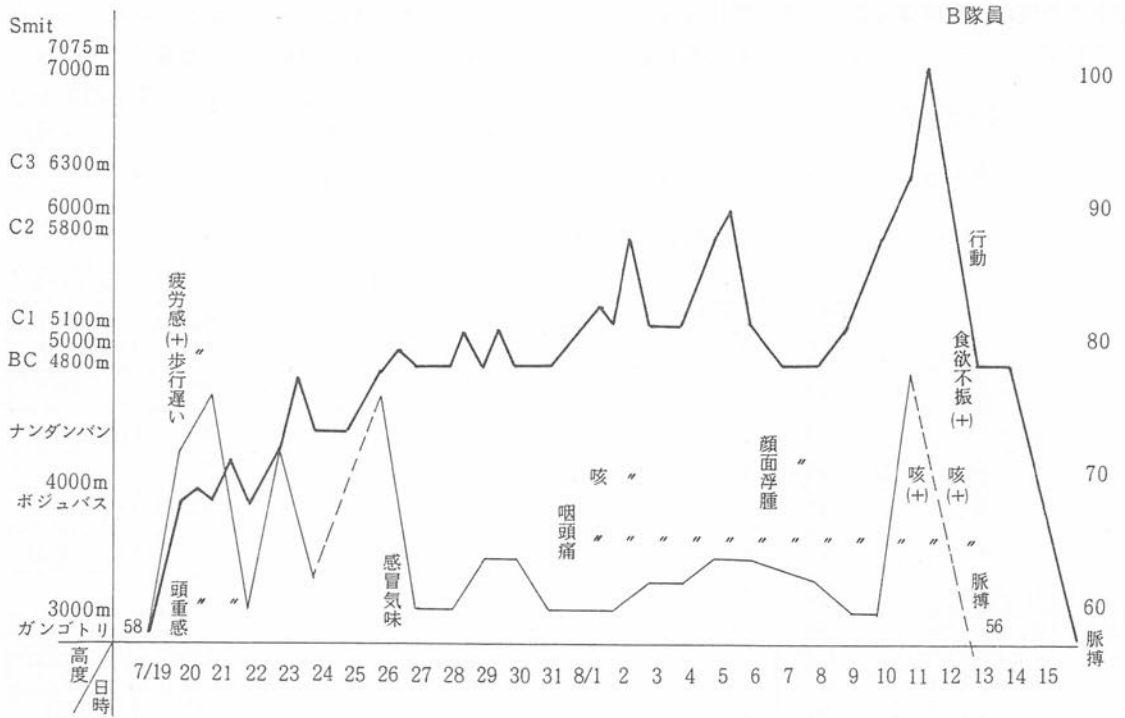
高度における血圧変化

	東京(6/2)	ガンゴトリ 3000m	ボジュバス 3790m	ナンダンバン 4300m	BC 4800m	C1 5100m	ボジュバス 下山
A	101 - 67	130 - 88	120 - 79	138 - 83	138 - 92		139 - 90
B	109 - 69	121 - 73	125 - 60	110 - 59	125 - 75	135 - 83	
C	106 - 65	132 - 84	115 - 83	101 - 68	130 - 94	136 - 86	138 - 93
D	117 - 80	118 - 74	124 - 78		134 - 94		
E	125 - 85	165 - 95	154 - 95	123 - 75	149 - 95		143 - 112
F	121 - 85	122 - 77	118 - 78	121 - 79	128 - 83		149 - 109
G	117 - 85	123 - 73	126 - 76	113 - 77			
H	118 - 80	129 - 84	122 - 80		123 - 82		
I	121 - 69	129 - 76	112 - 73	114 - 71	115 - 75		
J	115 - 74	130 - 80	131 - 59	105 - 76			125 - 91

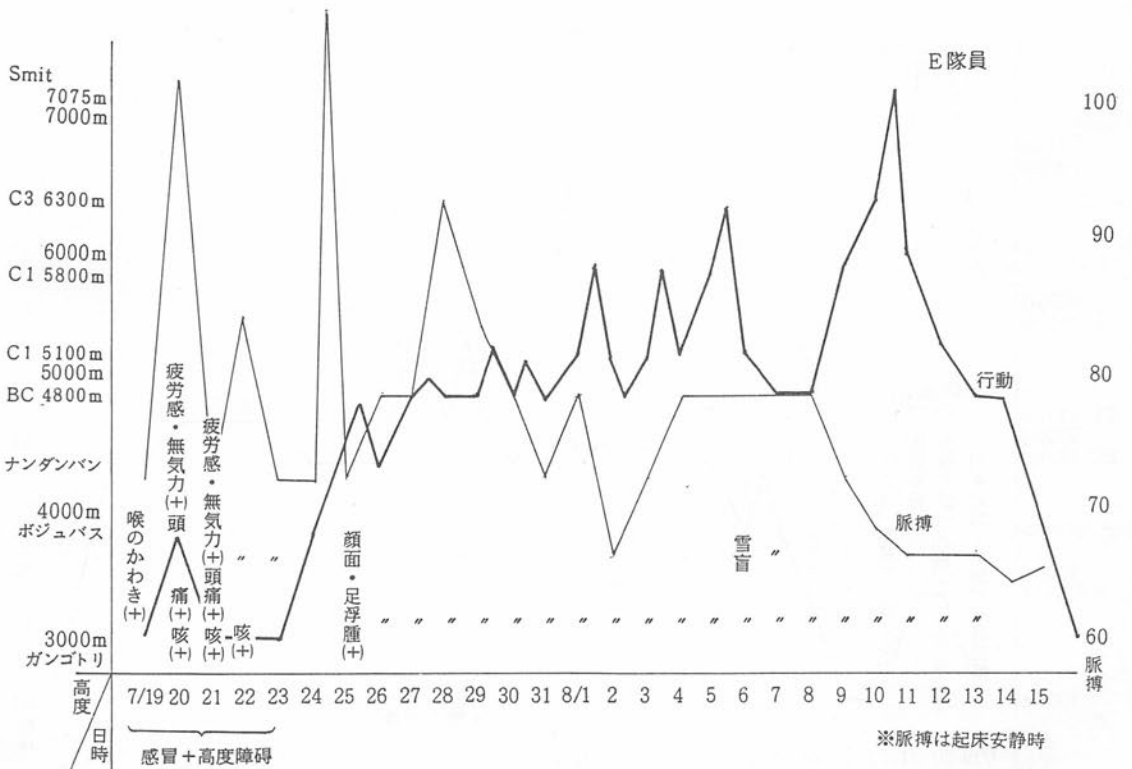
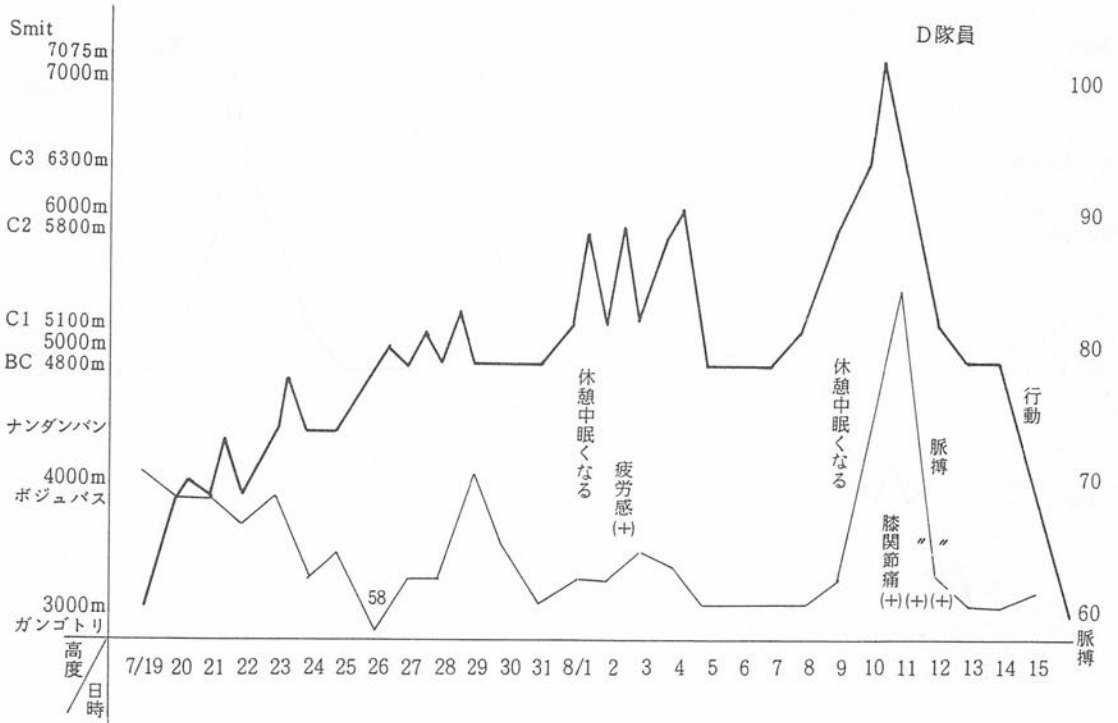
行動に伴う高所症状



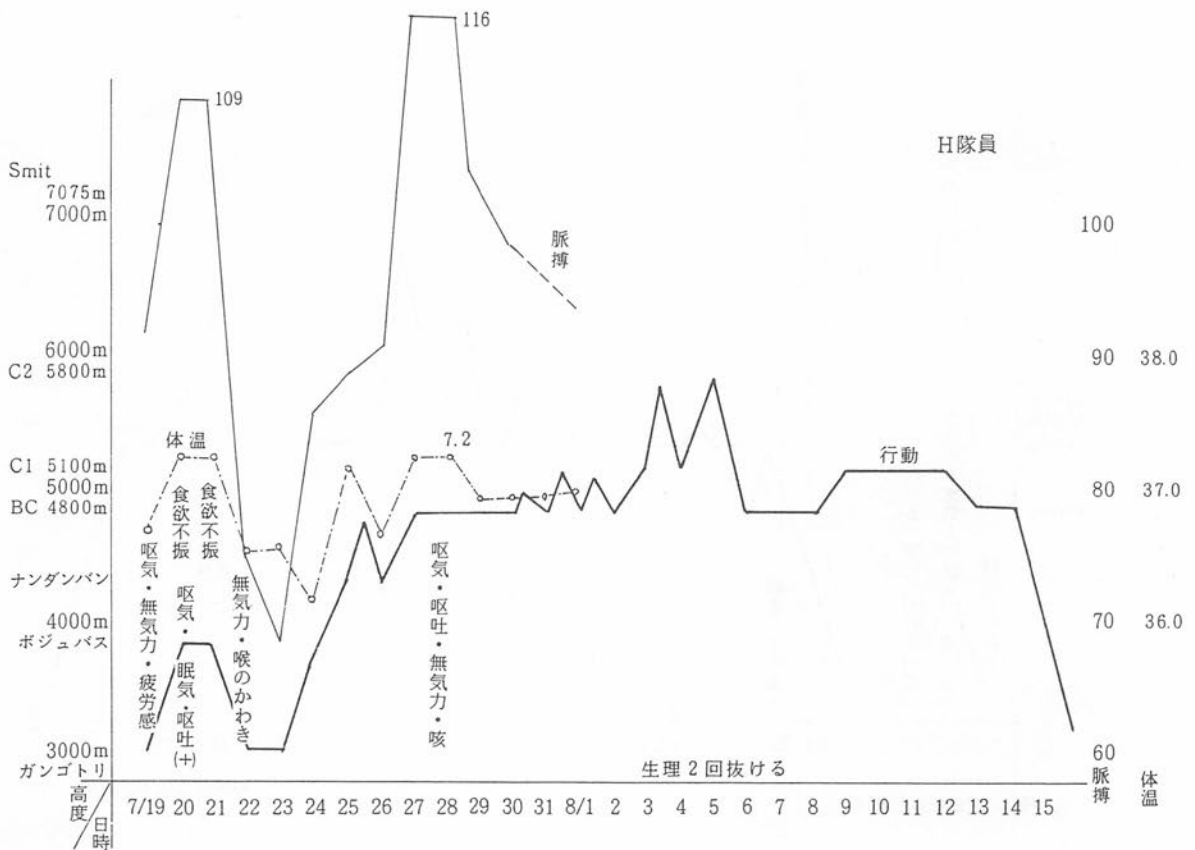
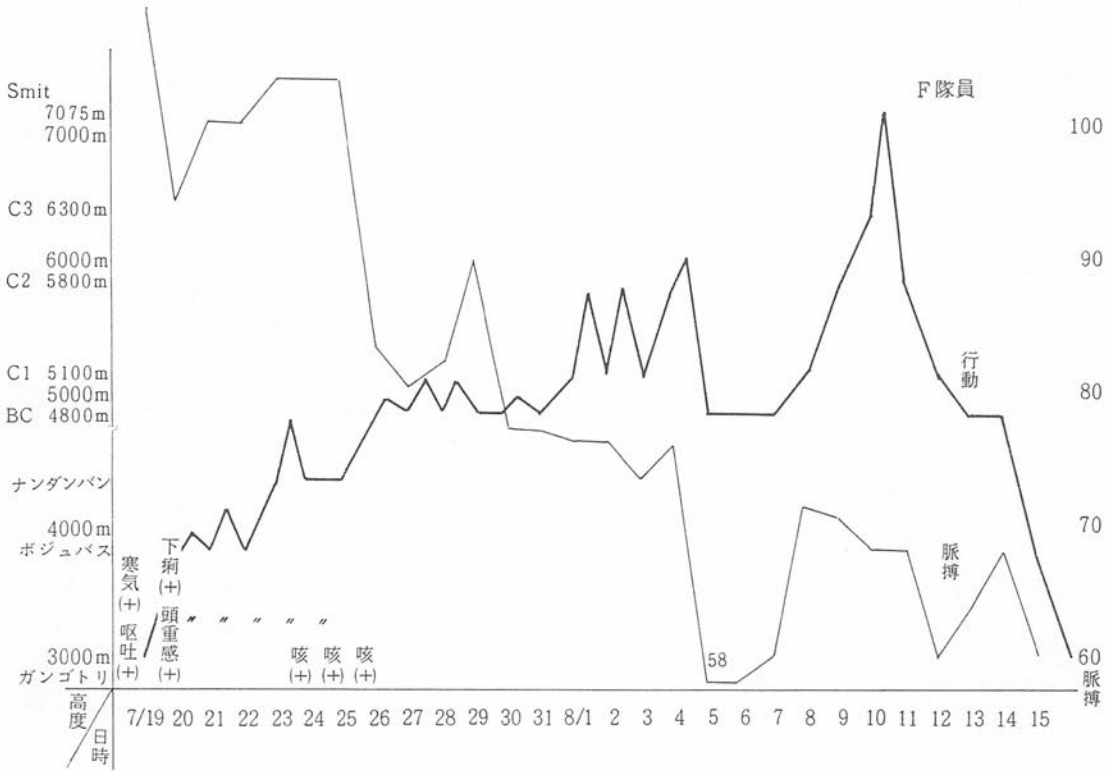
行動に伴う高所症状



行動に伴う高所症状

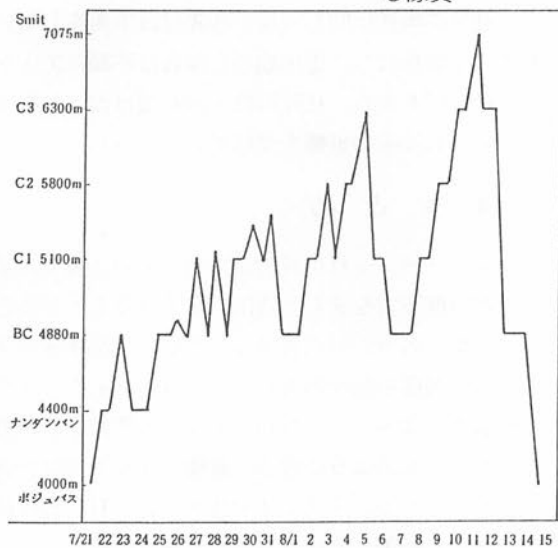


行動に伴う高所症状

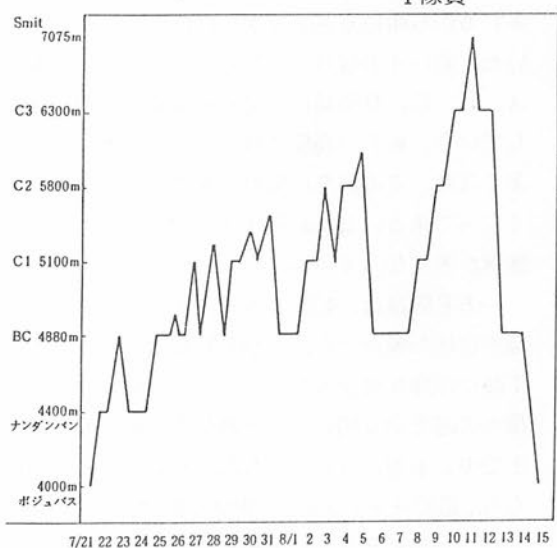


付 行 動 表

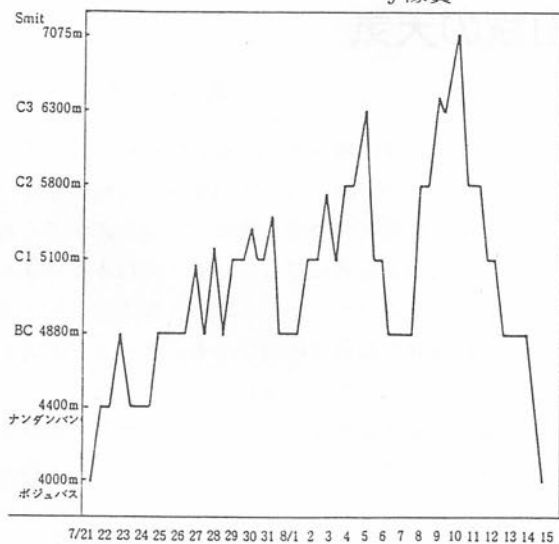
G 隊員



I 隊員



J 隊員



7. 高所症状について（行動に伴う高所症状参照）

健康チェック表を各自に渡す。10名中、年齢の多い方から順に6名までが、ほぼ完全に記載していた。若い4名はBC入り2～3日後まで記載。A、B、C、D隊員は、よく似た脈搏の増減を示している。新しい高度に行くと、少しずつ脈搏が多くなり、その高度に慣れて来ると、脈搏も少なくなってくる。また最終キャンプでは、4名共、脈搏が多くなっている。

一方E隊員は、4000mラインまでに体調を崩し、高所症状が強かった。しかしBC入り後は、顔面、下肢に浮腫が強かったものの、第一線で活躍、登頂への道を切り開いた。F隊員も、前半BC入りまで少し不調だったようだが、その後は、普通になり、最終キャンプでも、東京の脈搏より少なくなった。しかしデリーに戻ると85回と元に戻った。H隊員は、前半4000mラインまでに、高所症状が強く、その都度、体温も上昇していた。

一昼夜の絶食と睡眠で復調するが消耗が心配だ

った。C 2 5800 m 到達時も不調だったようで、一緒に登頂できなかったのは残念であった。しかし高所に順応した帰路は快調で、速く歩いていた。

女性の生理に関しては、B隊員は手術をしているので関係なし。更年期のC隊員は不順にて1ヶ月に2回もあり。H隊員は2回も抜けた。女性ホルモンも高所の影響を受けているようだ。

8. ま と め

キャラバン1日目3790mのボジュバスにて、2名が高度障害を来した時は、どうなることかと思ったが、各自の自己管理の良さか、上部キャンプでは、強度の高度障害もなく、ほっとした。また利尿漢方薬キササゲを初めて使ってみたが、再考の余地があるように思う。健康チェックでは、体温も計ったが、高所症状の強かった、H、E隊員以外では顕著な変化はなく、平熱に始終した。何はともあれ、全員健康で無事に帰国できたことを嬉しく思う。

ガンゴトリ山域の天気

遠 藤 京 子

夏休みを利用してガンゴトリ山域へ入山する登山隊のために、モンスーンの影響を受けるインドヒマラヤ中部山域の夏の天気を知りたいと思った。

ネパールの西北西に位置するガルワールやガンゴトリ山域では、東部ヒマラヤに比べれば、モンスーンの影響は少ないので、6月が登山の最適期であり、7月～9月も十分登れると言われている。

ベンガル湾の水蒸気が熱せられ、ヒマラヤの高い山脈にぶち当たって雨や雪を降らせるモンスーンも、インドヒマラヤの中部から西部にかけての山域では、緯度が上がるほど、西へ行くほど、また高度が上がるほど影響力は弱いとされているが、実際、私たちのめざすガンゴトリ山域の7月末から8月中旬にかけての夏休みシーズンには、どの程度の晴天日と行動できないほどの悪天日があるのかを知りたくて、過去の日本隊の報告を、平川宏子隊員の協力を得て調べてみた。

ガンゴトリ山域へ入山している日程が重なりあう3隊について調べた。1984年大阪歯科大隊のバギラティⅢ峰隊の登山日誌には天気記述が多く入っていたので参考になった。’89年の日本ヒマラヤ協会のヴァスキパルバット隊が、機関誌『ヒマラヤ』に載せた報告文の中からも、どうにか天気を拾うことができた。しかし、83年8月サトバントに登った娑婆羅衆の報告は、後半に登った難峰シヴリンの登攀記が中心になっているので、8月の天気は拾えなかった。

そこで、1984年と89年と私たちの90年サトバント隊の天気の比較図を作ってみた（図1）。

1日平均の天気を0から5まで6段階に分けて終日雨で停滞した日を0とし、一時大雨や大雪が降ったが行動した日を1とし、一時小雨や小雪の降った日は2、曇ってる時間が長かった日を3、晴を4、快晴を5とした。そのうち、頂上アタッ

クに適した4と5を晴天日と数えることにして、期間7月27日から8月15日までの20日間に現れた晴天日の割合と、停滞を余儀なくされた指標0の悪天日の割合を出してみた。

結果は図1のように、1984年の夏は登山隊にとって信じられないほど幸運な天気恵まれているが、89年のヴァスキ隊は気の毒なことに、ほとんど青空をバックにした山の姿を見ずに下山しているのである。私たちのサトパント隊は、その中間、概して好天に恵まれ、しかも非常に幸いなことに、登山期間中最悪の大雨(5000m以上では大雪)停滞日が、アタックを終えて全員がBCに下山した翌日の13日にやってきたという天気めぐりの幸運に恵まれた。もし1日早くこの悪天に捕っていたら、第2次アタック隊員はC3からの下山に相当苦労しただろう。実際、12日に頂上アタックしたイタリア隊の2人はその夜C3の私たちのテントに泊ったが、夜になって降り始めた雪のためにテントが潰れたので、降りしきる雪の中、早朝から逃げるように下山して、13日の昼すぎにBCへ帰還したのだった。

このように、わずか3隊の天気調査ではあるが、年によって大きな違いがあることがわかった。できれば、その年の夏の天候の特徴を、前もって冬や春から予知できるとよいのだが……。

1990年サトパント隊が記録した天気表は表1である。隊員が頂上アタックに出かけていた期間は、リエゾン・オフィサーに、天気と朝の気温だけを観測してもらった。

一般的に、朝は晴れ、午後は曇り、夕方から夜にかけて雨または雪というパターンが多いと聞いていたが、そのとおりの日が、7月28日～30日と8月3日～7日に見られた。

気温は概して高く、4800mのヴァスキタール(BC)で、朝6時、日の出直前の冷込み時で、 -2°C から $+4^{\circ}\text{C}$ の間にあり、プラスの日が観測期間20日のうち10日もあった。マイナスの朝は、高いピークの最頂部に陽が当たり始めたときに気温が最も下がり、池の辺りに薄氷が張りはじめ、池の真中には、バギラティⅠ、Ⅱ、Ⅲ峰とヴァスキパルバットの金色の峰が逆さに映っていた。早起きは三文の徳とか。いやいや100億ルビーの輝きで

したよ。

風の観測はキチンとはしていないが、概して西風が多かった。悪天のときは東または北東に変わった。雲はバギラティ谷の走行と同じく、谷の中を北西から上ってくるが多かったが、その日の天気の崩れは大きくない。やはり東または北東からの真暗な雲が、雨や雷を運んできた。

つぎに高層気象図と対照させ、特徴のある日の天気図だけ出しておく。北半球高層天気図500mb図、グリニッチ時12時(=日本時間21時、現地時間18時)の等高度線と等温線の図からインドヒマラヤを含む部分を切り取った。

8月2日 快晴→晴

7月31日から続いた晴天日の終わりの日だが、アラビアからインドへ張り出した優勢な高気圧の圏内にサトパントは入っている。チベット高原は連日の晴天で十分に熱せられ、高度5880mで $+3^{\circ}\text{C}$ にも上昇している。サトパントでも融雪激しく、クレバスは大きく開き、落石もある。ロープを固定するスノーバーやアイスハーケンがゆるむ。

8月9日 曇り→降雪、降雨

チベット高原のサトパント峰近くにL(低圧部)があり、またインド北部の同峰南東部にC(低湿部)の記号が見られる。山では悪天。9日朝はC2で15cm近くも新雪が降り積もったが、第1次アタック隊はC3へのヤセ尾根に不安定に付着した新雪の急斜面を、保坂隊長がスーパー・パワーを噴射して突き進んでいた。

8月10日、早朝一時晴れ。短時間だが山頂に日が当たったが、すぐに曇り空。午後には一時降雪もあった。

第1次アタック隊、ラッセルを交替しながら頂上アタック。頂上からの視界はよくない。C3からC2へのヤセ尾根の下山は、雪が軟かくて足場が崩れ、スリッしやすい状態となった。

8月11日 快晴→曇り

早朝から快晴となり、第2次アタック隊はC3からすばらしい写真が撮れた。北東の窓に浮かぶドーム状の巨峰カメット(7756m)がカメラに収まっていたのはうれしいことだった。

しかし、頂きに達した12時には、ガスが出て山頂から南や南東方向の山々が見られず残念だ。

8月12日 晴れ

11日夕方の天気図では、アラビア高気圧が西へ後退しはじめ、モンゴルの低圧部から気圧の谷がインド北部へと下りてきているが、C3からBCへの下山日、よく天気はもちこたえてくれた。

11日と12日の朝はよく冷えた。温度計をC2に置き忘れたので、 -10°C という数値は居合わせた4人の体感温度である。しかし、もし300 mbの高層図が見られたら、きっとサトパントの真上に寒気が近づいているだろうと思う。

8月13日 終日雨

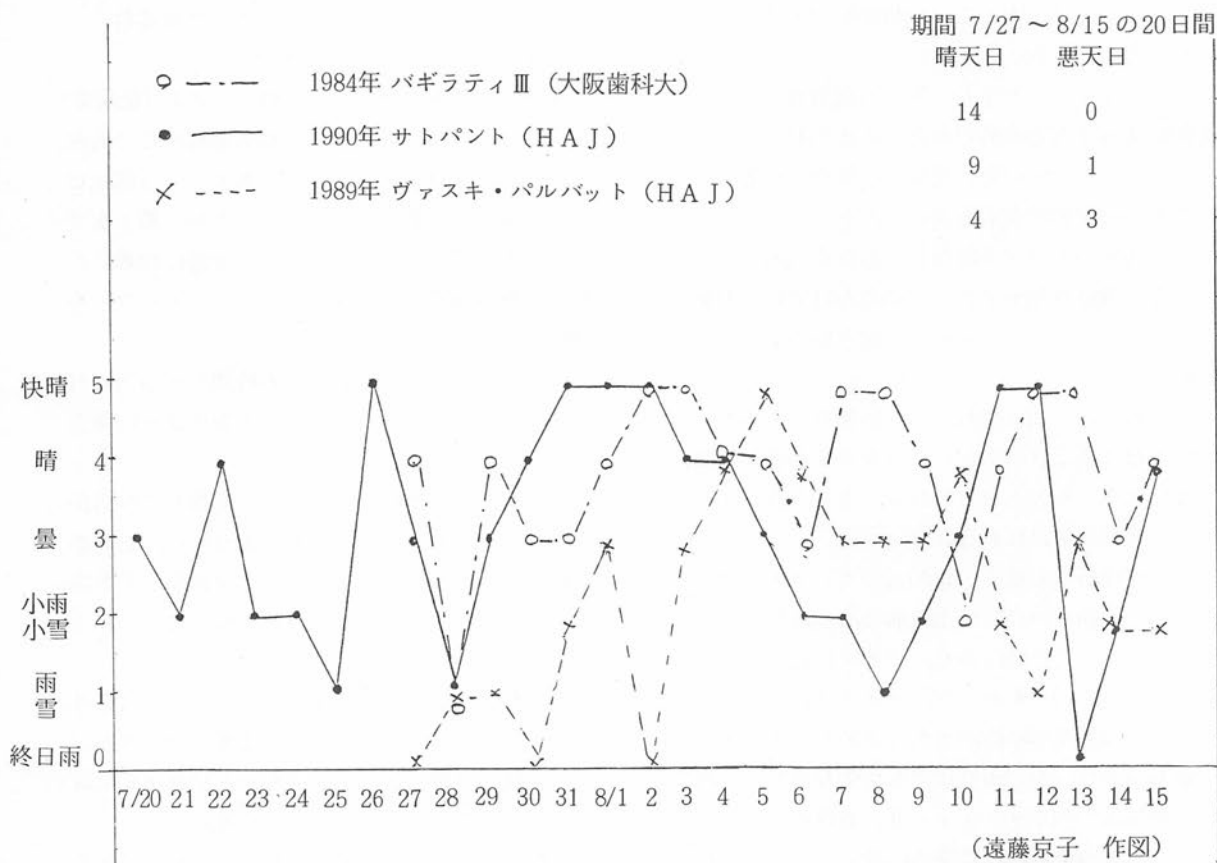
モンゴルの低圧部から南に伸びた舌の中にサトパントは入っている。ベンガル湾にも低気圧が発達し、モンスーンの天気図。しかも、サトパントの西方には -3°C の寒気団が見える。山は大雨と雪になった。

(ま と め)

インド・ヒマラヤでは、登山隊向けに天気予報が放送されると聞いていたので、その放送を当てにしていたが、入山前に、IMF、エージェントのシカール社、ウツタルカシのネルー登山学校と3カ所で尋ねてみたが、そのような放送はしていないという返事。ならば、一般向けの天気予報をラジオで聞いてほしいとリエゾン・オフィサーに頼んでおいたが、それもないという返事。

インドは気象衛星も飛ばしているし、軍事力も優れたお国柄だから、確かな天気予報技術は保有しているはずだが、それを利用するのは軍関係だけで、一般人は、その恩恵に預れないということだろうか。

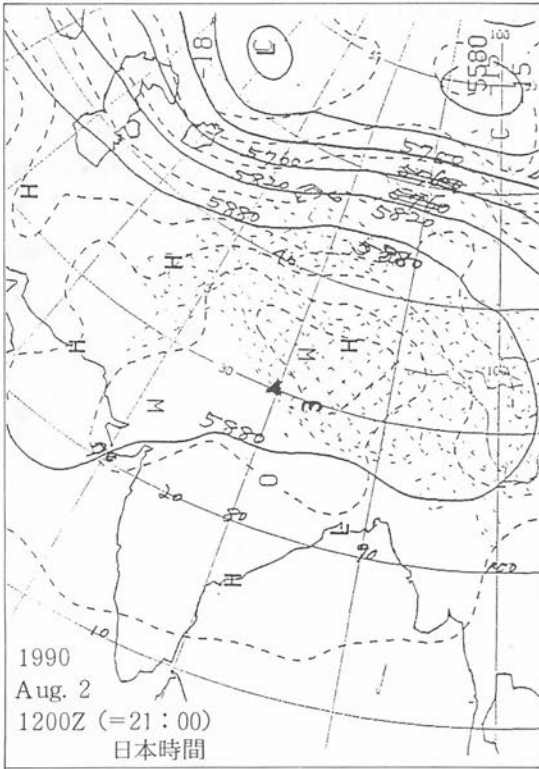
図1 ガンゴトリ山城の夏の天気3年の比較



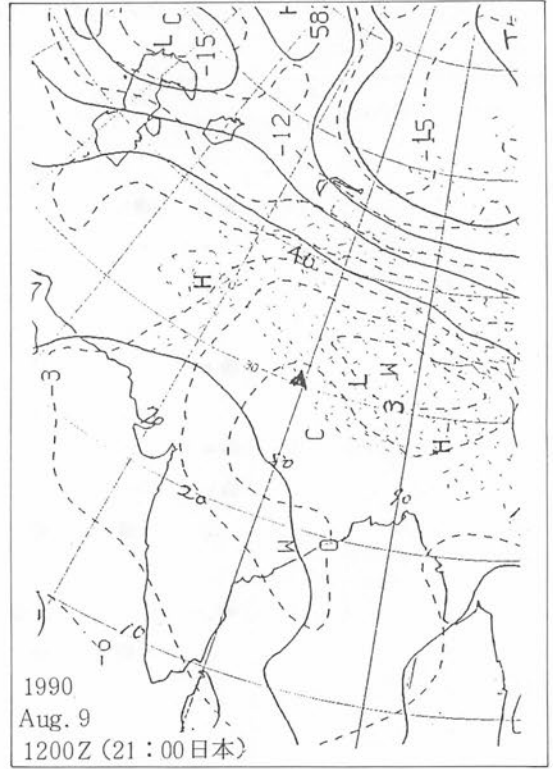
サトパントの天気 (1990年)

●大雨 ●小雨

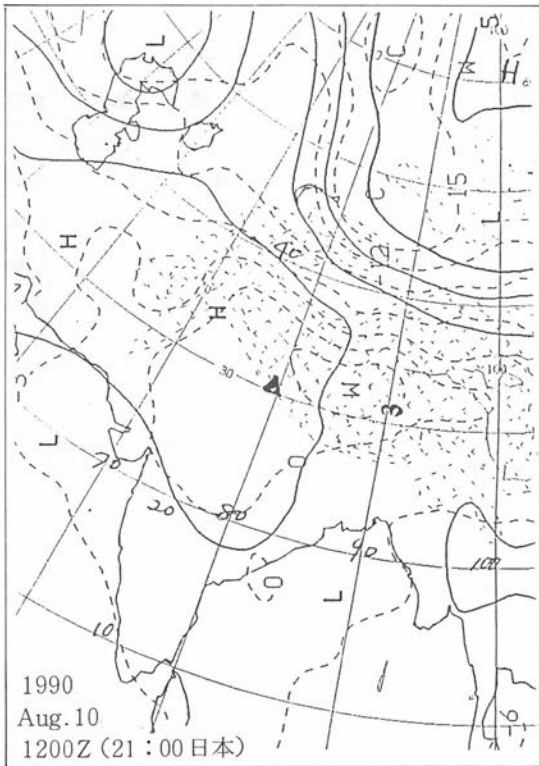
月日	場所	標高m	気温 朝6時	天気 朝 昼 夕(夜)	月日	場所	標高m	気温 朝6時	天気 朝 昼 夕(夜)
7・16	デリー→リシケシ		31℃	① ① ●①	8・8	BC		2℃	⊙ ① ●
17	→ウッタルカシ		29	●⊙ ●⊙ ①		C 1			⊙ ① ●
18	→ガンゴトリ 3000		25	⊙●① ●① ●①		C 2			●⊙
19	→ボジュバス		11	① ① ⊙	9	BC		2	⊙ ① ●
20	ボジュバス 3800		10	⊙ ⊙● ⊙●		C 1		1	● ⊙①⊙
21	ボジュバス		10	●● ⊙ ⊙		C 2		- 2	⊙15cm ● ⊙3cm
22	→ナンドンバン		7	① ① ●①	10	BC		4	⊙ ⊙ ●
23	ナンドンバン 4300		6	●● ⊙① ⊙①		C 1			
24	ナンドンバン		5	●● ⊙① ⊙①		C 2		- 1	⊙
25	→ヴァスキタル		6	① ①● アラレ ●①		C 3	6400		⊙ ⊙5cm
26	BC(ヴァスキタル) 4800		- 1	○ ① ①		頂上	7075		① ⊙
27	"		4	●① ① ⊙●	11	BC		2	○ ○
28	"		2	① ⊙● ●		C 1			
29	"		- 2	① ⊙ ⊙		C 2			○
30	"		1	① ⊙① ●		C 3		- 10	○ ⊙ ①
31	"		- 2	① ① ①		頂上			○ ⊙
8・1	BC			○ ○ ○	12	BC			○
	C 1	5100	- 2	○ ○ ○		C 1			①
2	BC			○ ○ ○		C 2			①
	C 1		- 4	○ ○ ○		C 3		- 10	○
3	C 1		- 2	① ① ⊙●	13	BC			● ●⊙ ●⊙
4	C 1		- 1	① ① ⊙●		C 1			⊙ ⊙15cm
	C 2	5700	1 (18:00)	① ① ⊙2cm	14	BC→ボジュバス		1	●①● ⊙ ⊙●
5	C 1			○ ⊙ ●		→ ガンゴトリ			① ① ⊙●
	C 2		- 5	○ ⊙	15	→ ウッタルカシ			① ① ⊙●
6	BC				16	→ リシケシ			① ① ⊙①
	C 1			⊙1cm ① ●	17	→ デリー			①
7	BC		3	① ⊙ ●					
	C 1			●					



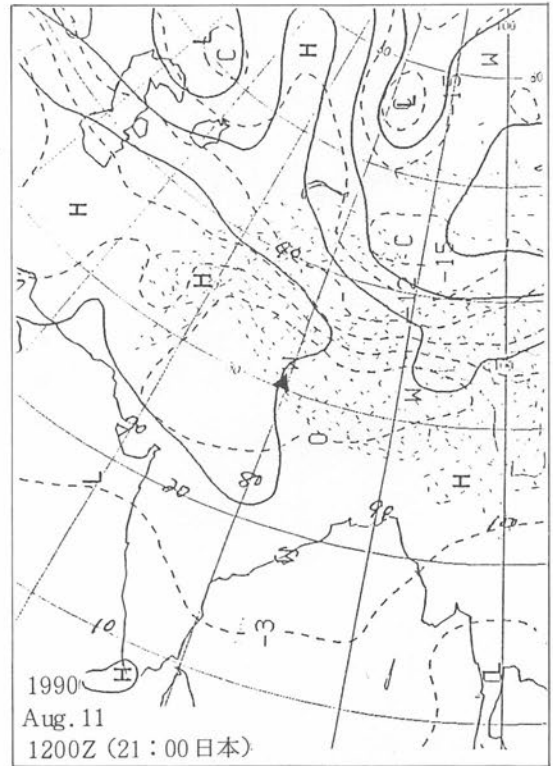
8月2日 快晴日



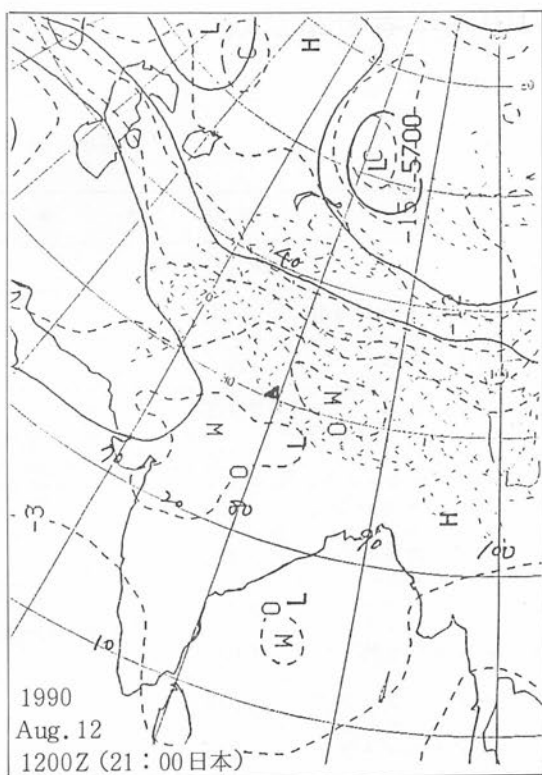
8月9日 くもり、降雪



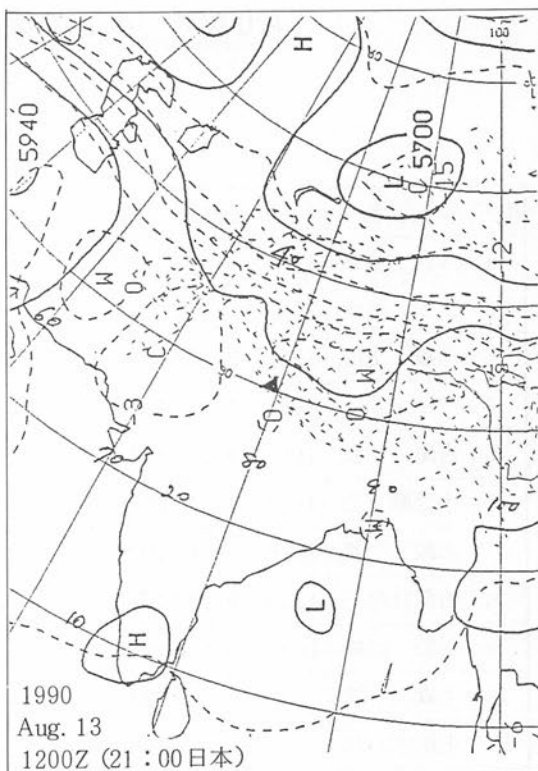
8月10日 晴→くもり→降雪



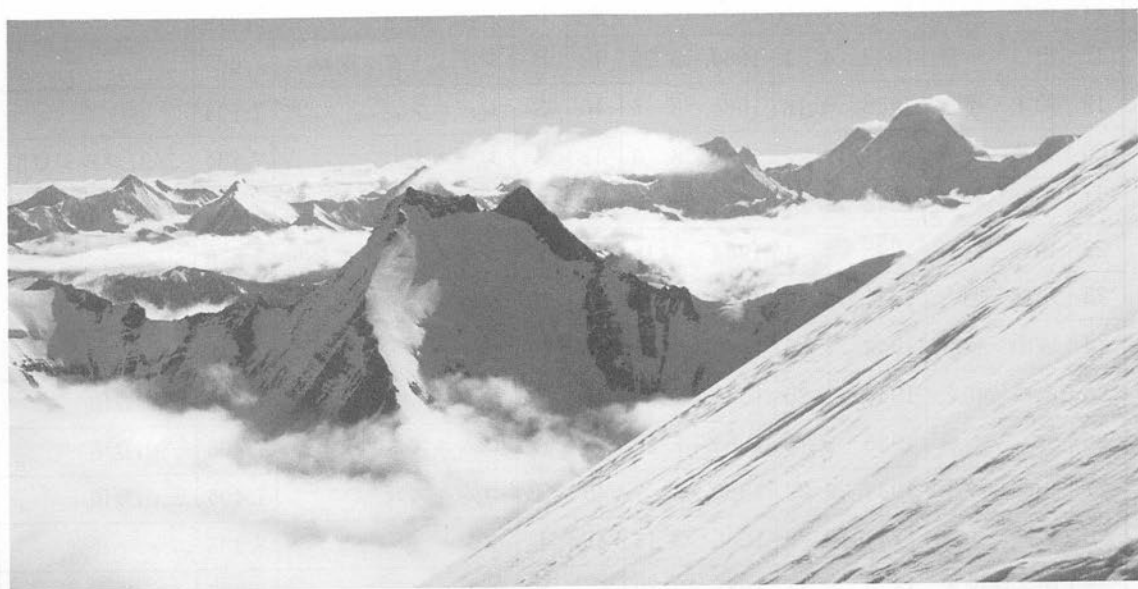
8月11日 快晴→晴→くもり



8月12日 晴→くもり



8月13日 大雨(大雪)



C3 上部よりカメット (右奥) を望む

7,000 m 以上の高峰の中高年者登頂状況

(1990年12月31日現在)

山森欣一調べ

番号	氏 名	生年月日	登 頂 日	年齢	国	山 名	標 高	備 考
1	今西 寿雄	1914. 9. 9	1956. 5. 9	41	N	マナスル	8,163	○
2	太田 欽也		1975. 8. 12	40	P	テラム・カンリⅡ	7,409	○
3	白旗 史郎	1933. 2. 3	1976. 8. 8	43	S	コムニズム	7,495	
4	内田 嘉弘	1937. 1. 27	1977. 8. 8	40	S	コムニズム	7,495	
5	吉尾 弘	1937. 4. 14	1978. 10. 20	41	N	パビル	7,052	○
6	小笠原 進	1939. 4. 1	1979. 7. 17	40	P	プマリ・チッシュ	7,492	○
7	水越 武	1938. 5. 1	1979. 7. 30	41	P	シア・カンリ	7,422	
8	田部井淳子	1939. 9. 22	1981. 4. 30	41	C	シシャパンマ	8,012	
9	日野 悦郎	1940. 5. 25	1981. 5. 7	40	N	ニルギリ北峰	7,061	
10	土森 譲		1981. 6. 29	44	C	ムスターグ・アタ	7,546	
11	上尾庄一郎		1982. 4. 22	43	C	カン・ベン・チン	7,281	○
12	西山 孝		1982. 4. 22	40	C	カン・ベン・チン	7,281	○
13	原 真	1936. 8. 16	1982. 7. 31	45	S	コルジュネフスカヤ	7,105	
14	原 真	1936. 8. 16	1982. 10. 10	46	C	シシャパンマ	8,012	
15	三原 洋子	1941. 5. 18	1983. 8. 24	42	I	サトパント	7,075	
16	高橋 晴夫	1943.	1983. 9. 30	40	I	サトパント	7,075	
17	高橋 和之	1943. 1. 26	1983. 10. 11	40	N	ローツェ	8,516	
18	出口 當	1942. 4. 1	1984. 5. 20	42	B	ジチュ・ダケ南峰	7,000	
19	鈴木 孝雄	1938. 5. 18	1984. 8. 5	46	S	レーニン	7,134	
20	近藤 和美	1941. 11. 22	1984. 8. 6	42	S	レーニン	7,134	7/31コルジ登頂
21	今井 利雄	1942. 11. 27	1984. 8. 6	41	S	レーニン	7,134	7/31コルジ登頂
22	新郷 信廣	1943. 3. 1	1984. 9. 15	41	I	マモストン・カンリ	7,526	○
23	小林 昭一	1941. 2. 28	1985. 4. 20	44	N	グルジャ・ヒマール	7,193	下降中死亡
24	横山 英雄	1942. 4. 26	1985. 7. 11	43	P	ラキナト・ピーク	7,070	
25	高橋 和之	1943. 1. 26	1985. 7. 28	42	S	コムニズム	7,495	三山登頂
26	原 真	1936. 8. 16	1985. 7. 29	48	S	コムニズム	7,495	三山登頂
27	田部井淳子	1939. 9. 22	1985. 8. 7	45	S	コムニズム	7,495	三山登頂
28	坂原 忠清	1944. 10. 20	1985. 8. 15	40	I	ヌン	7,135	
29	阿久津悦夫	1938. 8. 13	1985. 10. 30	47	N	サガルマータ	8,848	

番号	氏 名	生年月日	登 頂 日	年齢	国	山 名	標 高	備 考
30	松原 繁		1986. 5. 10	43	C	チャンツエ	7,553	
31	宮本 義彦	1944. 8. 25	1986. 5. 10	41	C	チャンツエ	7,553	
32	近藤 和美	1941. 11. 22	1986. 8. 3	44	C	コムニズム	7,495	三山登頂
33	鈴木 孝雄	1938. 5. 18	1986. 8. 3	48	S	コムニズム	7,495	
34	細井 賢治	1946. 3. 15	1986. 8. 3	40	S	コムニズム	7,495	
35	三原 洋子	1941. 5. 18	1986. 8. 16	45	C	ムスターグ・アタ	7,546	
36	須ヶ原光弘	1945. 5. 23	1986. 8. 17	41	C	7163m峰	7,163	○
37	新郷 信廣	1943. 3. 1	1986. 10. 14	43	C	カルジャン	7,216	○
38	小野寺光義	1945. 12. 7	1986. 10. 14	40	C	チョー・ウイ	7,354	○
39	日野 悦郎	1940. 5. 25	1986. 10. 16	46	C	チョー・オユー	8,201	ネパール許可
40	福沢 勝幸	1940. 3. 21	1987. 4. 18	47	N	ランタン・リ	7,205	
41	山本 大三	1944. 4. 21	1987. 4. 18	42	N	ランタン・リ	7,205	
42	小山 健二	1947. 1. 28	1987. 7. 24	40	S	コルジェネフスカヤ	7,105	
43	尾崎 啓一		1987. 8. 12	46	S	ムスターグ・アタ	7,546	
44	高橋 和之	1943. 1. 26	1987. 9. 21	44	C	チョー・オユー	8,201	パラパント降下
45	大谷 映芳	1947. 4. 3	1987. 9. 21	40	C	チョー・オユー	8,201	
46	高橋 通子	1942. 2. 1	1987. 9. 22	45	C	チョー・オユー	8,201	
47	大橋 良雄	1943. 8. 26	1987. 10. 14	43	N	プモリ	7,161	
48	出口 當	1942. 4. 1	1987. 10. 26	45	C	ラブチェ・カン	7,367	○
49	小川 貞夫	1946. 11. 28	1987. 10. 27	40	C	ラブチェ・カン	7,367	○
50	中村 省爾	1942. 5. 28	1988. 5. 5	45	C	チョモランマ	8,848	
51	中村 進	1946. 1. 15	1988. 5. 5	42	C	チョモランマ	8,848	
52	酒井 国光	1939. 4. 25	1988. 6. 27	49	P	ブロード・ピーク	8,047	
53	島方 健次	1947. 12. 14	1988. 6. 27	40	P	ブロード・ピーク	8,047	
54	金沢 健	1945. 10. 28	1988. 7. 22	42	S	コルジェネフスカヤ	7,105	三山登頂
55	尾形 好雄	1948. 7. 2	1988. 7. 28	40	I	リモI峰	7,385	○
56	渡辺 斉	1940. 3. 22	1988. 7. 29	48	I	リモI峰	7,385	○
57	新郷 信廣	1943. 3. 1	1988. 7. 29	45	I	リモI峰	7,385	○
58	三角 朗	1929. 10. 28	1988. 8. 14	58	S	レーニン	7,134	
59	近藤 和美	1941. 11. 22	1988. 8. 14	46	S	レーニン	7,134	
60	工藤 豊	1947. 10. 1	1988. 8. 14	40	S	レーニン	7,134	
61	森下健七郎		1988. 8. 16	40	S	レーニン	7,134	
62	羽村 孝之		1988. 8. 17	45	S	レーニン	7,134	

番号	氏 名	生年月日	登 頂 日	年齢	国	山 名	標 高	備 考
63	石田 和吉		1988. 8. 17	44	S	レーニン	7,134	
64	坂原 忠清	1944. 10. 20	1988. 8. 17	43	S	レーニン	7,134	
65	野村 光勇	1944. 10. 25	1988. 10. 9	43	N	プモリ	7,161	
66	辻 美行	1947. 6. 5	1989. 4. 16	41	C	シシャパンマ	8,012	
67	重野太肚二	1943. 4. 17	1989. 4. 21	46	N	プモリ	7,161	
68	武藤 英生	1949. 3. 26	1989. 7. 10	40	C	コングール	7,719	
69	安田 越郎		1989. 7. 10	40	C	コングール	7,719	
70	佐藤 英樹	1948. 4. 25	1989. 7. 24	41	S	コルジュネフスカヤ	7,105	
71	鴨沢 修		1989. 7. 24	40	S	コルジュネフスカヤ	7,105	
72	木下 祥子	1943. 12. 20	1989. 7. 28	45	S	コルジュネフスカヤ	7,105	
73	近藤 和美	1941. 11. 22	1989. 8. 6	47	S	ハン・テングリ	7,010	
74	家田 修		1989. 8. 11	42	S	ハン・テングリ	7,010	
75	井上 博之		1989. 8. 15	55	S	ハン・テングリ	7,010	
76	川原 慶紀	1940. 11. 19	1989. 8. 15	48	S	ハン・テングリ	7,010	
77	松本 正城	1948. 11. 5	1989. 8. 15	40	S	ハン・テングリ	7,010	
78	嶋村芙美江	1933. 1. 28	1989. 8. 16	56	S	レーニン	7,134	
79	藤倉歌都代	1943. 5. 15	1989. 8. 16	46	S	レーニン	7,134	
80	斎藤 惇生		1990. 5. 21	60	C	シシャパンマC	8,008	
81	中島 道郎		1990. 5. 21	59	C	シシャパンマC	8,008	
82	鈴木 孝雄	1938. 5. 18	1990. 7. 26	52	P	ガッシャブルムⅡ	8,035	
83	池田 壮彦		1990. 8. 3	43	S	ハン・テングリ	7,010	
84	関根 幸次	1933. 10. 1	1990. 8. 10	56	I	サトバント	7,075	
85	天城 敏彦	1947. 5. 15	1990. 8. 10	43	I	サトバント	7,075	
86	保坂 昭憲	1948. 2. 16	1990. 8. 10	42	I	サトバント	7,075	
87	桶川和気夫	1950. 3. 14	1990. 8. 10	40	I	サトバント	7,075	
88	遠藤 京子	1938. 5. 5	1990. 8. 11	53	I	サトバント	7,075	
89	平川 宏子	1940. 2. 25	1990. 8. 11	50	I	サトバント	7,075	

(注1) 国名の略：N＝ネパール P＝パキスタン I＝インド S＝ソビエト C＝中国
B＝ブータン

(注2) 備考の○印は初登頂

(注3) 実数74名。この内ソビエトだけの実登頂者は21名。8,000m峰は実数16名。

EXPEDITION REPORT

We HAJ Gangotri Exp. 1990 succeeded in reaching the summit of Mt. Satopanth, which is a famous peak in the Gangotri area. In the summer of 1990 we 10 members climbed against and overcame difficulty and on 10th August 5 members and 4 on 11th, totally 9 members reached the summit without any accident.

We are most thankful to those who assisted and helped us in India. They were IMF, Shikhar Travels (P) Ltd. and the Government of Uttar Pradesh.

We will report here about our expedition with deep thanks and gratitude.

PROGRESS

11th July

Advance party, Hosaka and Nakagawa, left Japan at 12:20a.m. four days behind schedule due to visa problem and arrived in Delhi at 9:30p.m. same day.

12 - 14th

Advance party had done custom clearance, checked the baggage deposited at Shikhar Travels, repacked many pieces of the baggage, prepared food and equipments, provided Liaison Officer with climbing equipments and waited for the main party.

15th

Sekine, Endo(Mrs.), Hirakawa(Miss), Amagi, Okegawa, Takita, Goto and Najiwara(Miss) left Japan as main party and joined the advance party and our Liaison Officer in Delhi at 10:00p.m..

16th

Starting from Delhi at past 10:00a.m. by bus, we had to change our way due to Hindu Festival. After lunch at Roorkee, we passed through Hardwar and reached tourist house in Rishikesh at dusk.

17th

Started from Rishikesh at 10:30a.m. due to permission clearance. Soon our way ran along the Ganges where we could see people transplanting rice and reached Uttarkashi at past 7:00p.m..

18th

Procuring some perishable food and visiting Nehru Institute of Mountaineering in the morning, we started in the afternoon gaining

height gradually, and reached Gangotri at past 7:00p.m.. Some members felt cold for we made about 2000m in height in one day. All members and staff of Shikhar Travels gathered and introduced each other.

19th

Worshipping the Gangotri Temple and strolling along the Ganges, we could see snow capped high peaks in front and on the right of us. Some members felt sickly due to height and coldness. We reached Bhujbas from 3:00 to 5:00p.m..

20 - 22nd

Acclimatizing and resting. Two members went down to Gangotri due to their bad condition. Going through Goumkeh and going up Gangotri Glacier, we established tents at Nandanban 4300m, from where we could see Mt. Shivling, Mt. Kedarnath and other peaks. We actually felt that we were in Himalaya!

23 - 24th

Acclimatizing and resting. Two members came up from Gangotri and joined us.

25th

Established BC at Vaski Tal 4800m. Some baggage did not reach us because the river had risen due to the squall which had come toward the evening. Some members had to spend a cold night, for they did not have their baggage with them, so others who had sleeping bags lent them their clothes.

26th

All members of the party gathered at BC at noon. Mt. Satopanth could be seen when we went up Chaturangi Glacier for about 1 hour. We braced ourselves up when we saw Mt. Satopanth which is a beautiful and shapely trapezium peak.

27 - 29th

Deciding the place of C1. Carrying baggage to C1 and scouting our route to C2.

30th

Established C1 on morains 5100m which was a comfortable place with a stream running by.

31st July - 2nd August

Making route and carrying baggage to C2. We were confronted by heaps of rock after climbing up loose glacier for about 1 hour. First we tried to make route on these heaps, but had to abandon due to danger of falling stones. We made route from right side of the heaps where we saw some seracs and fixed ropes, avoiding crevasses on snow wall 40 degrees directly. From there we climbed up left slantwise and up the wide ridge directly. The slope became loose at C2 5800m. In the day time it was hard to walk through because the sun melted the snow.

3rd
Established C2. From there we could see Mt. Vasuki Parbat. Top of Mt. Satopanth also could be seen just behind its own knife ridge with great dignity. In the glow of the setting sun, C2 was reestablished 10m to the west due to falling stones from the remaining heaps. We had a hard time working due to the high altitude.

4 - 5th

Making route on knife ridge to C3. This was the main point of our climbing because it was the most difficult and dangerous section. Beside knife ridge, it was very hard to climb because the condition of the snow ground was unstable and snow bars were not effective. In spite of these bad conditions, we could make route two pitches just beside C3. On this day we could have prospect of attacking.

7 - 9th

After taking rest for 2 days or more, the first team, Hosaka, Sekine, Amagi, Okegawa and Goto shifted to 6300m and established C3.

10th

The first team started from C3 at 5:30a.m.. Climbing up in deep snow, we reached the summit at 11:30a.m.. Although we could not see the spectacular view because of the thick fog, we took delight, blessed ourselves and took photos of one another. We started climbing down at 12:00p.m. and reached C2. The second team, Takita, Endo, Hirakawa and Nakagawa shifted to C3.

11th

The second team got to the summit at 12:00p.m.. Weather was similar to the day before. They climbed down carefully and stayed overnight at C3.

12th

All members were concentrated at Cl. We were busy cleaning and packing our baggage.

14th

We left BC and went the way we came reaching Delhi early in the morning of 18th.

I would like to express here our regret about Mr. Nalim Gautam, who was our Liaison Officer. He is a good climber, who could have climbed Mt. Satopanth and had the will to climb with us. But he had to give up climbing with us because our team's capacity was limited.

Let me add at the end. We hope we have been able to promote friendly relationship between India and Japan through our Indian Himalayan Expedition.

Akinori HOSAKA

leader of HAJ Gangotri Expedition 1990

御協力者名簿

大変お世話になりました。

厚く御礼申し上げます。

隊員一同

インド大使館
在印日本大使館
インド登山財団（IMF）
ネルー登山学校
ICI石井スポーツ
岩館センベイ店
呉羽化学
こまくさ山岳会
塩野義製薬
昭和電工
ソニー・エナジー・テック
太陽化学
トゥ・キューピー
東洋紡績
東レ・ベフ事業部
細川洋行
マルコメ味噌
明星食品
ユングフラウ同人
ロッテ・アド

天城素子
伊藤久美子
伊藤弓子
伊藤 守
稲田定重
梅本知栄子
遠藤 登
大久保博
尾形好雄
川崎浩史
川嶋保幸
越谷英雄
佐藤豊明
佐藤文保
関 久雄
関根峰幸
関根吉江
高本信子
滝田 悟
田中祥治

張 麗雲
出口 當
寺沢玲子
飛田和夫
中尾政樹
中岡 久
松館正義
宮川裕子
森下 茂
山添修志
山中茂樹
山森欣一

編集後記

90年サトパント隊員のその後の活躍たるや素晴らしいものがあります。まず91年の2月に、日印合同でカンチェンジュンガ(8,586m)に挑んで後藤が出発し、7月には関根がインド・カシミールのヌン(7,135m)、平川が中国四川省の雪宝頂(5,588m)へ、9月には中川がやはり四川省のミア・コンカ(7,556m)、遠藤がチョウ・オユー(8,201m)へ出発します。

なんと10名中5名もが翌年に次の遠征に出るというのですから、これもサトパント遠征隊の立派な成果に数えていいでしょう。

こうした仲間の活躍を指をくわえて横目で睨みながら、居残り組を中心に黙々と編集作業を行ってきたのですから、多少の発行の遅れは大目に見てもらえると勝手に思っております。

ともあれ、私たち10人が、1990年夏のガンゴトリ・ヒマラヤで、お互いに力を出しあい、それぞれの情熱を燃やしてきた記録を、ここにまとめることができました。遠征の準備をすすめて下さった方々、遠征をささえて下さった方々に、この場を借りて改めて御礼申し上げます。

(天城)

聖地巡礼の山旅

— サトパント峰登頂記 —

発行 1991年6月20日
発行人 HAJ ガンゴトリ登山隊1990年
編集人 天城敞彦、桶川和気夫、南指原さゆり
発行所 日本ヒマラヤ協会(HAJ)
〒169 東京都新宿区高田馬場3-23-1
淀橋食糧ビル506号
03-3367-8521
振替 東京0-48954「日本ヒマラヤ協会」
